

ガンゲイル・オンライ
ン 隣の芝生は青くみ
える

☆麒麟☆

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

SAOで攻略組の1人として頑張っていた中山 悠。

リアルではチビだのお子ちゃまなどと揶揄されコンプレックスを抱いていた彼はGOの世界で平均的な身長を手に入れる。

そんな彼はある時、荒野の真ん中で小柄な女の子のプレイヤーと邂逅する。

これは高身長を羨ましがる青年と低身長を羨ましがる女性の物語。

目次

予選終了後	88
予選終了	77
予選開始	66
B o B 予選当日	51
死銃	41
B o B 編	
ピンクのレン	30
小さなレンと青のルタオ	20
和解	14
仲間との再会	6
プロローグ	1

鼠との再会

プロローグ

2022年11月6日。

この日、完全ダイブ技術を用いた仮想大規模オンラインRPGVRMMORPGゲーム、ソードアート・オンライン通称SAOの正式開始日。βテスター含めたおよそ1万人のプレイヤーは期待に胸を膨らませながら仮想世界へとダイブしていった。……それが絶望とも知らずに。

同日、SAOの産みの親、茅場晶彦によるデスクゲームの宣言によつて現実世界に戻れず、現実世界に戻るべく浮遊城・アインクラッドの頂点、100層を目指すのだった。

そして2年後の11月7日、6147人のプレイヤー達が現実世界に戻つて来て、医者やその家族は大慌てで駆け出したりメディア達が囁し立てたりで世間を騒がせた。

それから月日が経つて2025年3月。

東京のとあるマンションの一室で1人の青年がいそいそと段ボールから荷物を取り出してクローゼットや押入れにしまい込んで行く。

「ふっふっふー。さっさと荷解き終わらせてダイブするかなあ〜♪」

彼の名前は中山ナカヤマ悠ユウ。150cm程の小柄で少々痩せ気味の体格の悠は時折汗を拭いながらマンションのあっちこっちを移動して行く。この春、大学生として北海道の恵庭

から東京に引っ越してきた20歳の青年。

ヴヴヴヴ

一通り荷解きを終えて腰を抑えながら身体を伸ばしていると悠のスマホが振動したのに気付いて手に取る。

「母」と画面に表示されたのに気付くと急いで通話に応じる。

「あつ、もしもし？うん、ごめん、連絡し忘れた」

本来なら東京に到着したら直ぐに連絡するのを見事にすつぽかした悠は通話越しから呆れ半分怒り半分の母の言葉を半分平謝りしながら会話を続けていた。

「だからごめんって。今、荷解き終わったばっか。え？隣に挨拶？あー、うん。するする。この電話終わったらお隣さんに挨拶するって」

1人暮らしする息子が心配なのはわかるが早く終わらないかとソワソワしながらアミユスフィアに目を配る。

「うん。しっかり挨拶するし迷惑もかけないようにするって。ゲームも……ほどほどにするよ。……大丈夫だって。アミユスフィアはナーヴギアみたいにはならないって。うん、ヤバイと思つたら直ぐに中断するから」

悠はSAOプレイヤーの攻略組だった。SAO時代の詳細は省くとして、悠の両親は愛する息子を危険な目に合わせたVRゲームを快く思っていない。悠も辛い目に合っ

て仮想世界とは距離を置こうとしたが、アインクラッドでの生活は辛いだけでなく楽しかった事もある。アインクラッドの事を思い出すと再び仮想世界にダイブしたい欲求に駆り出された。悠は必死に両親を説得させてなんとかナーヴギアの後継機アミュスフィアを手に入れる事に成功。

しかし、リハビリや大学に向かうためのマンション探しや勉強と今日に至るまで未だにダイブ出来ずにいた。

「うん、それじゃあまた」

悠は母親との通話を終わるときつきと隣人に挨拶しようと行動に移す為に手土産のお菓子を持って挨拶に向かう。

右隣の人に挨拶を終えると左隣の人の挨拶をするべく部屋の前に向かいインターホンを鳴らす。

「どちら様ですか？」

そう言っ出てきたのは背の高い黒髪の女性だった。

「う、羨まし……じゃない。隣に引越してきた中山です。これは非食べてください」
その女性の身長は170はゆうに越えていて低身長である悠は思わず羨ましがる。

「ありがとう坊や」

「ぼうっ!？」

悪気があって言ったのではないのは悠もわかるが坊やと言われて思わず顔が引きつってしまふ。

「す、すいません。俺……こう見えても20歳なんです」

「え？」

女性が聞き間違えたかのように聞き返す。

「だから！俺は 20 歳なので坊やはやめて欲しいんです！」

自分の年齢を強調するように言うと悠は女性の言葉を聞かずに部屋に戻って行く。

昔から低身長である悠は小柄である事から事あるごとに揶揄われていた。顔も中性的な顔立ちで声も他の男性と比べて些か高い。男らしくない自分をコンプレックスを抱いている悠は部屋に戻るなり、アミュシアを被りALOのソフトを起動させる。

「リンクスタート」

そう言うのと悠の意識は仮想世界に移行する。仮想世界なら自分のアバターを自由に変更できる。コンプレックスである自分の身体とおさらばして別の自分として動き回れる。

「むっ、このゲームはランダムアバターなのか」

どうやらALOは9つの種族を選ぶ事が出来るようだが容姿であるアバターはランダムになるらしい。

「まっ、いいか」

そう言つて種族をサラマンダーにしてALLOの世界に降り立つ。

いくらランダムだからつて今の自分より低くなることはないだろう。10cm、いや5cmでもいい。少しでも身長が伸びて現実より男らしくなっていればいい。そう思つていたのだが、数十分後……

「こんなゲームやめてやる!!!」

ALLOの何処かの種族の領地で叫ぶ悠の姿があつたのだつた。

仲間との再会

「なんだ、お前はALLOやらないのか？」

「やらん」

場所は東京都台東区御徒町にある喫茶店、ダイシー・カフェ。店内には店主であるアフリカ系のアメリカ人の大柄な男アンドリユー・ギルバート・ミルズ、通称エギルと呼ばれている大柄な男性とカウンター席を挟んで話している。

「何度もアバター作り直してんのに向に背が伸びない。寧ろ逆に縮んでった。だからやらん」

話してる内容は悠がALLOを始めて即辞めた事。最初、サラマンダーの種族を選んだ悠だったが、背が変わってないと言う事で金を払って再度種族を選び直した。少しでも背が伸びればいい。そう願っていたのだが、現実是非情だった。

シルフ、ウンディーネ、ノーム、インプ、スプリガン……。

いくら金を注ぎ込んでも背が伸びない。寧ろ縮んで行く。挙げ句の果て、ケットシーを選んだら背が110cmにまで縮んでしまった。その結果、悠はケットシーの領地で怒りの限り叫びログアウト。

それ以降、ALOには一切ダイブしてないのだった。

その経緯を話すとエギルは笑いを堪えることなく豪快に笑っていた。

「お前はアインクラッドでも言ってたな。こんなちっこい背は嫌だった」

「俺は長身の体型が欲しかったんだよ」

「それも何度も聞いたよ」

エギルは尚も可笑しそうに笑いながら言う。エギルも悠と同じSAOプレイヤー。アインクラッドでの生活の中でも気心の知れた仲の1人で時にはパーティーを組み、時にはボス攻略、時には愚痴や現実の事を話したりしている。

「そんで今は何してんだ？」

「GGO」

エギルの問いに悠は簡潔に答える。

GGOはガンゲイル・オンラインの略でVRMMOの一種。銃と疾風の

名の通り、荒廃した世界で遠慮なく銃弾を撃ち合うガチガチのPK推奨のゲーム。

運営はアメリカにあるザスカーと言う企業で公式リアルマネートレードが認められている唯一の作品でもある。

「SAOデータを引き継いで楽しく遊んでるよ。勿論、銃剣をメインにして」

「蒼の双銃剣ルタオ様はGGOでもご健在ってわけか」

「そうでもないさ。GGOとSAOじゃ勝手が違うから絶賛苦戦中だ」

蒼の双銃剣。SAOの中で悠のアバター、ルタオが呼ばれていた2つ名。SAOの中で熟練度達成でも得ることが出来ない武器スキル、他に類を見ないという意味からユニークスキルと呼ばれるものがあり、悠はその内の1つ双銃剣と言うユニークスキルの所有していた。

SAOは魔法なしの剣や斧と言った近距離武器だけで進めて行くRPGとしては斬新なゲーム。その中で唯一、飛び道具の銃を使えた悠は当時多くのプレイヤー達から質問責めに逢い逃げ回ると言う事があった。

その事を思い出した悠とエギルは思わず苦笑いを浮かべてしまう。

するとダイシー・カフェの扉が突如開き、悠とエギルはそちらに視線を移す。

入ってきた人たちを見て悠の顔は思わず綻ぶ。店に入ってきた人達は1人を除いて悠に比べて背は高いが些か悠よりも若く見える。

「やつほー、英雄様に副団長さん。リズにクラインもおひさー」

ダラけた口調で入店してきた人達に手をヒラヒラ振りながら挨拶する。

入ってきた人数は6人。1人は黒髪に黒服と黒ずくめの男子、桐ヶ谷和人ことキルト。2人目は和人の隣にいる栗毛の長髪少女、結城明日奈ことアスナ。3人目はその後ろにいる赤髪に趣味の悪いバンダナに髭を生やした社会人、壺井遼太郎、クライン。4

人目は1人はこげ茶のショートヘアで勝気な雰囲気の様子、篠崎里香ことリズベツト。5人目は明日奈と同じ栗毛でツインテールにしている小柄の少女、綾乃珪子ことシリカ。最後の1人は黒髪をボブカットにしている少女で和人の妹、桐ヶ谷直葉ことリーファ。

前者の4人は悠とエギルと同じようにSAOプレイヤーと一緒に攻略をしたり武器を作ってもらったりと悠も大変お世話になっていた。

桂子もSAOプレイヤーなのだが直接面識はなく、直葉に至ってはSAOプレイヤーでもないの悠は知らない。

和人の仲介で悠達は挨拶を済ませると、エギルは料理を出しちよつとしたパーティー状態となった。

今日、悠がダイシー・カフェに来たのは和人の誘いがあったからだ。

SAOから戻ってきてリハビリに明け暮れていたある時、悠のスマートフォンに和人から連絡がきた。

どうやら総務省の通信課の人に無理を言って悠達の所在と連絡先を聞き出したらしい。和人とはそれ以降、何度か連絡を取り合っていた。

“ALOにダイブ出来ないか？力を貸してくれ”や“SAOクリアの打ち上げするから来れないか？”などだ。

そして今回、東京の大学に通うことになるかと伝えると和人からダイシー・カフェの住所を教えてもらい、そこで会おうという感じで今に至る。

「にしてもリアルでも本当にちっこいなあ。ルタの字は」

「おい、口の聞き方には気をつける。この店をお前の血で染め上げるぞ」

「おいバカ、やめろ」

遼太郎の言葉に悠は目が据わった状態でシャドウボクシングを始める。悠に「ちっちゃい」「子供」「可愛い」は禁句でSAOの中ではそれで揶揄ってくる遼太郎を何度も殴り飛ばしていた。

「身長が欲しい。後20cmは欲しい。人並みの背丈を寄越せえー」

「あんたもう20歳なんですよ？成長期なんてとつくに終わっちゃってるでしょ」

「バカだなりズ。諦めたらそこで試合終了なんだよ。諦めず願ひ続ければ伸びるに決まってる」

「現実に向き合えよ」

「やめろキリト。哀れみの視線を向けながら肩を叩くな。わかるか？酒を買おうとしたら『坊やは未成年だからお酒は買えないの』なんて店員に優しく窘められるんだぞ？一々免許証見せないと買えないんだぞ？」

「それだけ若く見られるんだからいいじゃない。子供料金で色々楽できるわよ」

「そ、そうですよね！近頃、映画も料金高いから羨ましく感じます！」
「嬉しくねえんだよおおおお!!」

里香の言葉に珪子はフオローするように言うが効果は無く、悠は机に突っ伏しながら絶叫する。小柄な背丈な所為か、悠のその行動が駄々を捏ねている子供のようだと明日奈、珪子、直葉は思うも口には出さなかった。

「そ、そう言えば悠さんって北海道から来たんですよね？どんな感じか聞かせてくださいー！」

話題を変えようと直葉が聞いてくる。直葉の行動に和人、明日奈、珪子は内心で称賛の拍手を送っていた。

「そうだね……直葉ちゃんのご期待に添えるかわかんないけど……」

悠は突っ伏していた顔をムクリと上げて足元に置いてあった紙袋からお菓子をみんなの前に出す。

「北海道じゃそれなりに有名な菓子店で買ったやつ食いながら話そうじゃないか」

悠の言葉に女子陣は喜びながら手を伸ばすのを見ていたら悠は思い出したかのよう
に和人と明日奈に話しかけた。

「そう言えば、お前達ってリアル現実でも付き合ってるの？」

悠の言葉に和人と明日奈は初心的な感じで照れる。SAO時代、2人はある事件を境に

交際を始め結婚をした。勿論、ゲーム内での話。

2 2層にある家を買おうとした際、金銭不足で和人と明日奈は仲間内に金を借りて来たのを覚えている。

2人の様子を見て現実でも付き合っていると確信した悠はニヤニヤする。

「どこまで進んだ？ A？ B？ C？ それとも Dまで進んだか？ E、Fは年齢的にまだか。最終的にどこまで進むつもりだ？ ほら、お兄さん口堅いから教えてみな」

悠の言葉に直葉と里香は赤面するも興味津々の様子で和人と明日奈の方を見る。この中で1番若いからか瑠子だけは意味が分からず首を傾げていた。明日奈は赤面しながらモジモジしていて和人は助けを求めようとエギルと遼太郎の方を見る。しかし2人は助け舟を出すつもりはなく、遼太郎は妬みが口から漏れていてエギルは楽しそうに見ているだけだった。

「A、B、Cって何のことですか？」

「そっかー、シリカは知らないのか」

「よし、教えてあげるから耳かして」

「教えなくていい（から）ー!!!」

我慢出来ずに聞いて来た瑠子に里香と悠は楽しげに言うのと和人と明日奈に止められてしまう。

「あちゃー。止められちゃったかー」

「珪子ちゃん、興味あるなら帰って来てから、恋愛 A B C」で調べてみな」

悠の言葉に珪子は返事をして帰ってから調べてみようかと決心する。

「そんな事より、北海道の話きくんだろ!？」

「そつ、そうだよ！私もすつごく興味あるから聞きたいなあー！」

「しゃーないなー……」

悠の言葉に和人と明日奈は安堵し直葉と里香、珪子はあからさまに落胆の表情を見せる。

「……………この話が終わったら聞けば良いんだし」

その言葉に2人はピシリと固まる。

「逃げられると思うなよ？逃げようとすんならクライン達総出で捕まえて根掘り葉掘り聞き出す」

そう言い終えると悠は北海道の観光名所やご当地飯の話をした後に宣言通り和人と明日奈から話を限なく聞き出す。

現実でもこうやって和人やクライン達と再会でき尚且、バカやれる事に嬉しさを感じる。少しでもこの日常が続く事を祈りながら里香と遼太郎を中心に和人と明日奈の恋愛事情を聞き出すのだった。

和解

エギルの店、ダイシー・カフェでS A Oでの仲間、和人達と再会した悠は数週間後、都内にある大学にいた。

「……………良い天気だなあ〜」

大学の教室の隅にある机に1人寂しそうに座る悠は頬杖を突きながら快晴の青空を覗いていた。4月の北海道は残雪が多く残っていて肌寒いのに東京は暖かくて気持ちいい。

「このサークル面白そうじゃん

」今日、この後飲みに行かぬ？

「君、なんて言うの？可愛ういーね！

「……………ふっ、見事にぼっちか」

思わず自嘲気味の笑いが出てしまう。

2年前、推薦入学でこの大学に通う事が可能になった悠。しかし、S A Oのデスゲームによってこの話はおじちゃんになったかと思っただが生還したと言う事で普通枠として通う事が叶った。普通ならあり得ない事だが、S A O事件は一種のテロのような扱いで

特別措置だと悠は聞いていた。

念願の大学に通えると意気揚々に大学に向かったが、結果は見事に独りぼっちとなっていた。それなりにコミュニケーション能力があったと自負していたが、SAOで過ごしていた2年でその能力は見る影もなくなっていた。

話題を振ろうにも今の流行りが全く分からず話題を振る事も出来ないし振られても答える事が出来ない。VR MMOなら話せるけどやってそうな人は悠が見た感じがない。しかも、この大学はエスカレーター式で上がって来た人達が大半で初めから仲が良くて、その中に入る勇気がない。

こうして悠は入学早々ぼっちと化してしまった。

「隣、空いてます?」

「へ? ああ、どうぞ……。つて、え?」

「あつ」

悠は声をした方に振り向くと固まる。そこにいた人は悠の隣人の長身女性だった。相手の女性も相手が悠だとは思わず固まっている。

「あー、えー、取り敢えず席空いてますからどうぞ」

「あ、ありがとうございます」

女性はそう言うと言席に座る。他の席も講義開始時間になるにつれ、仲良しグループでどんどん埋まっていた。

「……………」

「……………」

女性が座るも周囲の人達のように和気藹々となる事はなく静寂さだけが続く。女性に坊やと言われてカツとなつて以来、話す事は一切なかった。寧ろ互いにこの大学に通つてると今になって知つたぐらいだ。

悠はこの早く部屋に帰つてVRにダイブしたいと考えていたら、唐突に女性から話しかけてきた。

「あ、あの…………。お菓子ありがとうございます」

「えーつと、気にしないでください。お口に合つたなら何よりです」

「あのお菓子、ルタオのだったけど貴方も北海道から？」

「も、つて事は貴女も？」

ルタオは、北海道千歳市に本社を置き、小樽市を中心に北海道内のみならず直営店舗展開をしている洋菓子店。悠が引越しの挨拶にと買ってきた物でもあり、悠が仮想世界で自身のアバターにつけている名前でもある。

悠は女性の言葉に聞き返すとコクリと頷く。

「帯広からです」

「帯広……豚丼」

帯広と聞いた悠は真つ先に豚丼を思い出す。甘辛いタレで焼いた豚肉を丼ご飯に乗せたご当地グルメ。思い出した瞬間、思わずニヤケてしまう。

「おっと、俺は恵庭から来ました。……これと言つて言える事は……うん、ないな」

悠は顎に手を当てながら答える。先程の静寂さが無くなり、2人の雰囲気は幾分和らぐ。それを感じた女性はこの雰囲気か途切れる前に謝罪を口にした。

「この間はすみませんでした。知らなかったとは言え失礼な事言っちゃつて……」

「いや、こつちこそ失礼な態度をとっちゃつてすみません。えーつと」

「小比類巻です。小比類巻 香蓮と言います」

「小比類巻さんね。俺の事は敬語なしでいいですよ。歳上とは言え同じ学年ですし」

「それ、中山さんもじゃ？」

「ほら、それはアレだよ。ファーストコンタクトが悪かったから少しでも印象回復をと思って。ぶつちやけ言ううと小比類巻さんが話しかけてこなかったら、ぼつちライフ継続するところだった……」

小比類巻さんが良ければちよくちよくで良いから話しかけて来て。このままだと寂しくて死ぬ」

「ウサギか」

「うん、そんな感じでOK。あ、勿論、小比類卷さんが面倒だと思えば無視してくれてもいいから」

「ううん。わたしの方こそお願いしたいかも。わたしも大学内で話し相手いないから……」

「そうなんだ？小比類卷さん長身でスタイル良いし美人さんだから大学内にいる男子から声かけられてるかと思った」

悠の口から『長身』と出た瞬間、女性こと香蓮は暗い表情を見せるもその後に出た言葉に思わず赤面してしまう。

「俺なんて男の癖に声も高いし、顔も童顔より、更にはちっちゃい。カッコいい服着ようとしても背ちっこいからヤボったく見えるし」

悠の口から出た愚痴を聞いて自分と同じ悩みを持っているんだと気づく。香蓮は長身の所為で大女と揶揄されてコンプレックスを抱いている。悠はその逆なんだろうと香蓮は感じ取った。

「わたしもこんなに背が高いから可愛らしい服着たかった」

「小比類卷^中山^山さんが羨ましい」

悠と香蓮が声を揃えて言った事に思わず笑ってしまう。隣の芝生は青いとはまさに

この事。悠は香蓮の長身が、香蓮は悠の小柄な背丈が羨ましく感じていた。互いのコンプレックスを取り替える事が出来てれば今の自分とは別の人生を歩めるんじゃないかと思う。

しかし、そんな事は出来ないのは分かっている。羨ましがってても背が伸びるわけでも、縮む訳でもない。そう考えた2人はよろしくと言いつけ合い授業の準備に取り掛かる。

そして予鈴が鳴ると講義が始まると和気藹々とした雰囲気から一転して全員、真面目に講義に集中する。悠と香蓮も授業に集中するも内心で互いのコンプレックスについて愚痴り合うのもありかもと思うのだった。

小さなレンと青のルタオ

北海道に比べてとんでもなく暑い東京の8月。悠は絶賛、GGOにダイブして遊び尽くしていた。GGOでの悠は小柄な青年などではなく、平均的な身長を手に入れ、SAOの時から使っているルタオと言う名前で荒れ果てた荒野を彷徨っていた。

青を基調としたフォーミュラスーツを身に纏い、腰には同じく青を基調とした銃剣、ヴァリアントザッパを携えている。

「ふっふっ♪経験値がっぼがっぼだなあ」

荒野にポップするモンスターやプレイヤーをキルし終えた悠はホクホク顔で首都グロツケンに戻ろうとしていた矢先、激しい銃撃が聞こえ警戒を強める。

「うひゃー!?!ずるい! 多人数で襲って来るなんて卑怯だー!」

「ほーら、逃げろ逃げろ!」

「じゃないと殺しちゃうよ〜!」

「よっしや! 腕吹っ飛ばした!」

「んじゃ俺は足狙おう」

「あの子可愛いな。なんか嗜虐心に目覚めそう」

ルタ才はバレない位置、尚且つ状況を見渡せる位置に移動する。すると、あからさまに初心者と思わしきプレイヤー相手に9人が取り囲んでいる酷い状況が見えた。

少女姿と思しき初心者プレイヤーは右腕と左足が無くなって赤いエフェクトが煌めいていて、その周囲を熟練プレイヤー達がジリジリと近寄って来ていた。

「これは酷い」

GGOはPK推奨ゲームとは言えマナーはある。粘着質に追いかけて回してPKしたり、チートPKはご法度。そして今のように初心者プレイヤーを取り囲んでPKするのはルール違反ではないが暗黙の了解となっている。

「……………ふう」

これは見捨て置けない。現実なら兎も角、仮想世界の悠なら助ける事が出来る。ルタ才は足に力を入れると人間とは思えないレベルの速度で駆け出す。腰に携えていたヴァリアントザッパを掴むと1人の首筋に銃剣を差し込み、引き金を引く。

「……………え？」

突然の事に攻撃されたプレイヤーは意味がわからないみたいに呟くと同時にHPバーがドンドン減っていき0となる。0となったプレイヤーは途端にポリゴン状に四散していき、その場には恰も最初から誰もいないようになっていた。

「なっ!？」

「は？……は？」

他のプレイヤー達も訳も分からず狼狽しているのを見てルタオは初心者プレイヤーの所に駆け寄って脇に抱えてその場から離れる。……ある物を落として。

「え？へ？」

助けたプレイヤーも可愛らしい声で混乱しているとチクリと何かが刺さる感覚が腕に走る。

「回復剤打ったから」

ルタオの言葉にプレイヤーは自分のHPバーを見てみるとジワジワと回復しているのがわかった。

「あっ!？」

狼狽えていたプレイヤーの1人がルタオを指差す。すると他のプレイヤー達も氣付いて急いで銃を構える。

「俺達の獲物に手え出してんじゃねー!」

「あからさまに初心者を囲んでたお前らが悪い。と言うか恥ずかしくないの？こんな幼気なプレイヤー虐めて恥ずかしくないの？バカなの？死ぬの？死ぬ」

ルタオがそう言った瞬間、熟練プレイヤー達の足元が突如爆発を起こしプレイヤー達は吹き飛んで行った。

「なっ、グレネードなんて何時の間にも!？」

「え?あの子抱えた序でに置いてきた」

吹き飛ばされ驚いているプレイヤーの1人にルタオはそう言ってヴァリアントザツパーをプレイヤーの眉間に構えるとGGO特有のシステムアシスト、バレット・ラインが銃剣から伸びている。

「わ、悪かった。頼むから撃たないでくれ」

「それをあの子が言ったらお前らはどうしてた?」

「た、頼む!折角手に入れたレア武器を失いたくないんだ!!」

「おっ、それはいい事を聞いた。ランダムドロップが楽しみだ」

「頼む……頼むよ!!」

「そう言えばこう言うの聞いたことない?銃を撃つていいのは撃たれる覚悟のある奴だけだ」

「クソつたれ!!」

プレイヤーの言葉を最後にルタオは躊躇いなく引き金を引く。そして残ったプレイヤー達も残らず眉間を撃ち抜いてPKを済ませる。

「うんうん、更に経験値増えて俺は嬉しいよ」

ポリゴン状に四散していったプレイヤーにルタオはそう言うのと助けたプレイヤーの

所に近づく。

「うーん、まだ無くなった手足は戻らんか。この場でボケつとしてたらまたルーキー狩りに逢いかねないからグロツケンまで抱き抱えるけどいい？」

プレイヤーはコクコクと無言で頷いたのを見てルタオは再度、脇に抱えてその場から素早く去りグロツケンにあるマイホームに向かう。

「ほい、お茶」

「あ、ありがとうございます……」

グロツケンにあるマイホームに招き入れるとテーブルに座らせお茶を出す。助けられたプレイヤーは受け取ったお茶をチビチビと飲みながらルタオを見る。

「にしても運なかつたな。稀に初心者を狩って経験値やら武器を手に入れる輩がいるんだ」

「武器って……わたしの安いやつなんですが」

「安いやつでも売れば金になる。微々たる金でも弾薬費や回復剤の足しにはなるし」

ルタオはそう言うとういんどウを開くとアイテムストレージから今日倒したプレイヤー達の武器をドサリと机の上に無造作に置く。

「さて、アイテム分配と洒落込もう！」

ルタオはそう言うとういんどウを襲つて来たプレイヤー達の分を少女の方にズラす。

「ほい、さつき襲って来た奴等の。K S V K? やたらと重いのもあるんだなあ」

ルタオはそう言って12 kgある対物ライフルを手に取る。銃知識のないルタオはこの銃の名前も知らず、レア度も分からない。対物ライフルは日本サーバー内で10丁しかない激レアの銃。オークションにかければ最低でも数万は手に入る代物だが、そんな事知らないルタオは興味なくなったとばかりに机の上に無造作に放る。

「こんなに貰っていいんですか?」

「いいよいいよー」

「後から請求したりなんかは……」

「俺、そんな器の小さい奴じゃないから。足りないならもう少し足す?」

ルタオの言葉に少女は首をブンブンと振って取り分をストレージに仕舞おうとする。

「そう言えば俺、ルタオって言うんだけど、キミの名前は?」

「わたし、大学 se: :「ちよつとまったー!」へぶし!」

少女が何かを言おうとした瞬間、ルタオはヴァリアントザッパーのマガジンを少女に投げつける。見事に眉間にヒットした少女は当たった部分を抑えながら非難めいた視線を向ける。

「キミ、絶対リアルな自己紹介しようとしたろ? そうじゃなくて、このゲーム内、GGOで使用してるプレイヤー名を教えてくださいって言ったの」

「あ、なるほど！わたしレンって言います」

「OK、レンな。俺の事は気軽にルタオと呼んでくれていい。敬語も要らない。わかった？」

「う、うん。わかりまし……じゃなくてわかった」

「レンはVR MMOはコレが初めて？」

ルタオの言葉にレンはコクリと頷く。

「そう。じゃあ、先ず最初に言う事は初対面相手に絶対に身元バレるような発言を口に出す事は禁止。見ず知らずの相手に自分の身元をバラしたりして被害に遭ってもそれは自己責任になるんだ。」

些細な情報からプレイヤーの住所を突き止める粘着質なストーリーカー野郎だってこの世にはいるんだ。リアルルの事を話す際は重々気をつける事、OK？」

「う、うん。わかった」

ルタオの迫力にレンは小さな身体を縮ませながら返事する。その後、会話もなく互いにストレージの整理をしていた時、レンはふと思いついたかのようにルタオに尋ねた。

「そう言えばさっきのあのスピードって何？人間離れたスピードだったけど」

レンの言葉にルタオは何言ってるの？みたいな訝し気にも直ぐに思い出したような顔を見せる。VR MMO RPGでは倒した際に経験値を手に入れ、それを自分

のステータスに加算させる事が出来る。

ルタオのステータスはS A Oから引き継がれていて全体的に俊敏値^{A G I}寄り。なので本気で走れば陸上競技を舐めプする事も可能。

この事はV Rゲーマーなら誰しもが知ってる常識のような物だが生憎、レンは初心者。経験値の振り方も分からないのなら知らないのも仕方ないとルタオは考え1から説明した。

「それならわたしも、ルタオさんのように足が速くなれるの？」

「それなりの経験値を稼いでA G Iに割り振れば出来る。勿論、A G I以外にも割り振らなきゃいけない。筋力値^{S T R}が低ければ持てる武器や防具も限られるし。どんなスタイルでプレイしていくか考えてから割り振ってみればいい」

「因みにルタオさんのステータスは？」

「俺のはA G Iをメインにしてる俊敏型。メインの武器も軽めの物にしてるし」

ルタオはそう言うのと腰に携えていた銃剣、ヴァリアントザッパーを机の上に置く。

「実弾のハンドガンだから射程は短い。だからスピードを生かして間合いまで近づいたら斬って撃つって言うのが俺の得意としてる戦闘法。それ以外の銃も使うことあるけど、この方がしつくり来る」

ルタオの言葉にレンは顎に手を当てながら悩み始める。自分のアバターをどう言う

風に育てて行くかと言うのもゲームの楽しみ方。レンがどんなスタイルでプレイして行くのか期待が隠せない。

「あつ、それと何処かお店ってないの？貰った武器とか売りたいし、別の服とかも着たいんだけど」

「俺も全部知ってるわけじゃないから期待に応えられるかは分かんないけど、予定が空いてる日にも案内するか？」

「え、いいの？」

「と言うか暫く、スコードロン……チーム組まない？正直、今までのやり取りで馬鹿正直にリアル的事とか暴露しそうで怖い。VRゲームに関する最低限のマナーだけでも教えていたんだけど。勿論、嫌なら断ってくれていい」

ルタオの言葉にレンは考え込む。確かにVRゲームの事は調べたけど他の事は分からない。そしてレンは自信と積極性を身につけてコミュニケーションを取れるようになると言う目的の為、VRゲームを始めた。

そして何より、再び1人となった時に先程のように多人数に襲われるのは真つ平だと考えたレンはルタオの案に承諾した。

そして2人はフレンド登録をして後日会う日程を取り決めるとその日は解散となった。

「あれ？」

ルタオが既にログアウトした時にレンはある事を思い出す。先程も会っていた男性プレイヤー、ルタオ。ルタオは北海道にある洋菓子店の店の名前。そしてつい最近、数ヶ月前に隣人に貰った物もルタオのお菓子。

これって偶然？とレンは疑問に思うも本人は既にログアウト済みで問う事は出来ない。

「まあ、いいや」

今度、会う時にでも聞けば良いやと決めたレンはルタオ同様にログアウトして現実に戻ったのだった。

ピンクのレン

翌日の夜8時。悠はGGO内で知り合った小柄な女の子のプレイヤー、レンと会うべくGGOにダイブする。

「おっ、約束時間より早く来るなんて優秀だ」

昨日、ログアウトしたマイホームからインしたルタオは既に来ていたレンに軽く挨拶する。

「約束の10分前に来るのは当然だよ」

対するレンは頬をプーつと膨らませてプンスカと怒っているが、小さい所為か怖くはなく寧ろ可愛らしく思ってしまう。

「あ、それよりゴメンね。昨日、ルタオさんの家でそのままログアウトしちゃった」

「荒らさなければ別にいいよー。つーか、マイホームは購入しといた方がわりかし便利だからオススメしとく」

S A OやA L Oでマイホームを購入すると数百万と物凄く金がかかってしまうが、GGOでは高くてもその1/10で購入出来るってしまう。

「何か利点あるの?」

「1つは1人でまったりしたい時にゆつくり出来る。見た目とは裏腹に防音されてるから爆音で音楽鳴らしてもパーティーメンバーで攻略会議しても外に漏れる事はない」「それ良いかも！他には何かないの?」

「他にはだなー。ロッカーがある事か?」

何故にロッカー?と疑問に思うレン。ロッカーにはアイテム保管が可能。PKされた際にランダムドロップされたくない武器などをその中に入れれば奪われる必要はない。そして、自宅に入る事が可能なのは購入者とその購入者が認めた者だけ。なので奪われる可能性は限りなく低い。

「だから大切な物盗まれたくなかったら空いてるロッカー使っちゃっていいから、ドン　詰め込んでんじやえ」

「うん、ありがとー」

そう言うのと2人は家を出て昨日手に入れたドロップ品を売りに武器店に寄って全てをクレジットに換金する。その際にやたらとクレジットが入った事に2人は疑問に思うもラッキー感覚にしか考えず店を出て服屋に向かう。

「グロッケンの街はなまら入り組んでて迷路みたいになってるから小まめにマッピングをしといた方がいーぞー。ほれ」

ルタオはそう言うのとレンにメールを送る。近くにいるんだから口で言えばいいのに、

と思いなながらもメールの中身を開いて見ると中途半端だが、グロツケンの街のマップピンがさがされていた。

「後でそれ頼りに自分のマップに書き写しな。ないよかマシだろ」

「ルタオさんって慣れた感じで説明してるけど、結構な頻度でVRゲームしてるの？」
「そりやまー……それなりに」

ルタオは思わず丸々2年やってましたから、と言いかけて曖昧に答える。

「以前はALOをそれなりにやり込んでたんだ。ダンジョンなんかはマップピングが重要だからねー。完成したマップを売って金にするって事もしてる奴いたし」

「えーそれって優しくくない！其処はタダで配布するものじゃないの？」

「それはプレイヤー次第さ。マップピングで売るつもりがない奴は欲しい奴に無料で配ってた奴もいたし、せこい奴なら高額で売ろうとする奴もいるし」

ルタオの説明に納得のいかないレン。そんなレンを見てルタオはレンの頭を叩きながら叩きながら高笑いをあげた。

「あつはつはー！お前さん見た感じ馬鹿正直な感じだなあ。世の中には色んな人がいるんだ。レンの様な正直な奴もあれば狡猾な奴もいるし残忍な奴もいる」

「ルタオさんみたいにお人好しな人もいるもんね」

「ほっ？俺ってお人好しに見える？……まあいいや。そんな感じでゲームの中にも色ん

な奴がいるんだ。もし、そう言うのが嫌だつてんなら、困つてる奴がいたら出来る範囲で手助けしてやりな」

「うん、そうする！」

そんなこんな話していると目的地の戦闘服屋に辿り着く。店内に入るなりレンは服を漁り始める。レン曰く、可愛いアバターになったから可愛い服を着てみたいとの事。

レンの気持ちはルタオにもわかる。ルタオの場合は人並みの背を手に入れたのだからカツコイイ戦闘服を着たいという欲求があつて金が溜まると武器より先に戦闘服屋を物色していた。

「どうさ、見つかった？」

「うーん良さげなのは見つけたけど生地の色が……」

暫くしてからレンが戦闘服を持つてやつて来たが色に不満があるようで納得した感じではない。そんなレンにルタオはある一点を指差した。

「なら、試しにアレをやってみ」

ルタオが指差した場所には服のカラーリング可の張り紙が貼られていた。文字通り、衣服のカラーリングを自由にする事が可能という物。

「俺のこの戦闘服も本来ならグレーつて地味な色だったけどカラーリングで真っ青にしちまった」

「ありがとう！」

レンはそう言つて一目散に試着室に入つていく。数分後、服の上下は勿論バンダナ・手袋・装備ベルト・ショートブーツ迄もがピンク色に染め上げたレンがやつて来た。

「ご満悦そうだ」

「うん、ちよつとくすんだピンクで想像と違った。けどそれでも可愛いくなつて嬉しい！」

そう言つてピョンピョン飛び跳ねるレン。その姿はまるで飛び跳ねている小動物の様に見える。そう思ったルタオはふとある帽子に目が入り、レンの頭に無断で被せてみる。

「ふえ？」

「試しにそれも同色にして見て」

ルタオの言葉に素直に従つたレンは再度試着室に向かう。そして戻つてきたレンはかなりの上機嫌だった。

「何これ！すつごいいいいね！わたし気に入っちゃったよ！」

先程よりも飛び跳ねるレン。

(……まるでウサギみたい)

ルタオが被せたのはくすんだ緑色をした動物耳を模した様な帽子。試着室で他と同

じくピンクに染めた帽子は飛び跳ねる度に動物みたいの耳みたいにフツサフツサと揺れる。

「お会計済ませてくるね！」

らレンはまるで脱兎の如く店員のいる所に走って行き会計をすませる。偶然見つけた物を被せてみたらあそこ迄気に入るとは思ってたなかつたルタオ。

「……まっいつか」

ルタオはそう言うのとスキップしながらやって来るレンをみる。

「ねえ、武器もカラーリングって可能なの？」

「うん可能」

なら、と言う事で2人はそのまま、武器店に行きレンは手持ちのサブマシンガン、スコーピオン2丁を同じくピンク色に染め上げた。

「見事に全身ピンクになったなあ」

「やっぱり変……かな？」

レンの言葉にルタオは首を横に振る。

「いいじゃん別に。ここは現実と違って仮想世界だ。つまりはゲームであつて遊びでもある。遊び方つてのもーつじやない。ガチ勢なら世紀末姿でヒヤッハーしてる奴もいるし縛りプレイして奴もいる。レンの様に可愛らしくして楽しんでる奴もいる。」

何が言いたいかと言えば、最終的には楽しんだもん勝ちなんだよ」

「そっか。うん、わたしこれで頑張ってみるよ!」

「その意気だ。そんなじゃ早速、フィールドに出て経験値稼ぎに行くぞー!」

レンの襟元を掴みながらルタオは意気揚々とフィールドに向かう。そしてこれを機にレンは他プレイヤー達からピンクの悪魔と言う2つ名が囁かれ畏怖されるようになった。

それから3ヶ月程経ち……

『敵はっけーん』

『こつちも見つけたよ。撃っちゃっていいかな?』

『……うーん。他のプレイヤーは見えないし……殺っちゃえバーサーカー』

『人を狂戦士みたいに言わないで!』

砂漠地域のフィールド。通信越しでルタオと会話したレンは一言そう言った後にレンは駆け出す。目指すはレンに気付かず周囲警戒をしている3人のプレイヤー。

「なっ、いつの間に!?!」

気が付いた時はほんの数mの距離。そうなればレンの必勝パターンに入る。レンも

ルタオと同じようにA G I優先にステータスを振っていて人間離れたスピードを出す事が出来る。

そのスピードを生かして相手の懐まで近づき、両手に持つてるスコピオンを撃ちかましてキルをとる。そして仲間がやられた事に気付いて振り向くも既にレンの姿はない。プレイヤー2人の背後に回って素早くスコピオンで撃つとプレイヤー達は撃たれた部分は無数の赤いエフェクトが煌めいたままポリゴン状に四散していった。

『グツキル！そんなじゃ、直ぐ戻ってきてー。今の銃声で他の奴らも来るかもだし』
『はい』

ルタオの通信にレンは返事すると猛スピードでルタオの所に向かって走って行く。その間、ルタオは双眼鏡で他の敵影がいないか観測する。

「バーサーカーじゃなくてアサシンだったなー」

切っ掛けはレンがピンクに染まった日。あの後、フィールドに出た2人だが、運悪くプレイヤーと接敵、交戦したのだが何故だかルタオだけ狙われる戦闘となった。

1人残されたレンは敵プレイヤーが気付いていない事に気付く、ルタオに夢中になつてる間に敵を屠った。安全確認した後2人は何故レンを無視していたのか議論があった。そして2人は気付く。レンのピンク衣装は砂漠とほぼ同化して見づらい。寧ろ青色の衣装を着ているルタオの方が派手でプレイヤーの視線はそっちにしか映ら

なかったのだと。

これは使えると考えた2人は早速行動に移す。砂漠色のギリースーツを購入してルタオは敵がいなか探し出し指示する。そしてその指示に従って天然のステルス能力を得たレンは素早く近づき経験値を稼ぐ。

レンもPKをするのに優越感が覚えて着たのかどハマリしていき、今では中堅レベルまで達していた。

「はい、今日もおつかれー」

「うんおつかれー」

グロッケンに戻った2人はマイホームに戻ると今日の反省会を兼ねて飲み食いしていた。

「それにしてもルタオさんって凄いよね。予兆もないのにモンスターやプレイヤーの位置捕捉したりするなんて」

「VRゲームをやり込んで見たら出来るようになるんじゃないかね？」

「疑問形で言われても困るんだけど……」

SAOの攻略組プレイヤーは多かれ少なかれ、システムが用意しているスキルではなく、システム上の仕様やモンスターの癖などを利用したテクニク、システム外スキルを習得している。

ルタオはその中で超感覚^{ハイパーセンス}や聴音を駆使しながら索敵して指示を出しながら危険回避していた。

「そんな事はさておき、レンとスコードロン組んで3ヶ月ちよい。腕試しにコレに出場しない？」

ルタオはそう言うとういन्दウを開いて運営、ザスカーからの告知を見せる。内容は第3回 バレットオブバレット B o B、GGO最強のプレイヤーを決めるバトルロワイヤルのイベント開催の案内だった。

「自分の腕っ節がどの程度通用するか試すには打って付けだと思うんだ」

ルタオの誘いにレンは乗り気がしないように首を横に振る。

「わたしはいいかな。今でも満足してるから」

「うーん残念」

一緒にプレイしてメキメキと上達していくレンが何処まで通用できるのか楽しみにしてたのだが、無理に誘うのも悪いと思いいルタオは渋々引き下がる。

「その代わり、めいっばい応援してあげるよー」

その後、2人はログアウトしこの日のプレイを終了した。

翌日……。

“砂漠フィールドの正体不明プレイヤー・キラー討伐隊募集！”

と言う張り紙がグロツケンの至る所に貼られていた。内容から見てまだレンとルオの正体までは掴めてない。

これを見たレンは……

「いやだ！怖い！撃たれたくない！もうPK自重する！」

マイホームで慌てふためくレンを見てこれ以降PKは控えてモンスター狩りに勤しむのだった。

B O B 編

死銃

12月の上旬。悠は大学を出ると夏に親から貰ったお下がりの車を運転しながら銀座に向かつていた。

「つーか、なんで銀座なんだよ。普通にダイシー・カフェでもいいだろ」

昨日、GGOから戻って来たたら和人から電話で銀座にある喫茶店に来るよう頼まれた。パーキング駐車場に車を停めるとそのまま言われた喫茶店まで歩いて向かう。

「いらつしやいませ。お一人様でしょうか？」

指定された喫茶店に到着するなりウェイトレスが接客しにやって来た。するとある席から来るように頼んできた制服姿の和人が手を振っていて、悠はあその連れです、と答えるとウェイトレスはあからさまに迷惑そうな顔を見せてきた。

(キリトの野郎何しやがった)

迷惑そうな顔をしたウェイトレスはそのまま和人のいる場所まで案内する。席まで近づくと和人の他にスーツを着た真面目そうな男も一緒にいた。

「悪いな学校終わりに呼び出して」

「高校生のお前が気にする事じゃないだろ。んで態々呼び出した理由は？そんでその人は誰？」

「初めましてキミの事はキリトくんから聞いているよ。僕は菊岡誠二郎。総務省総合通信基盤局高度通信網振興課第二別室……うん、長つたらしいから仮想課で覚えてくれ。僕はそこに所属してるんだ。ここは僕が持つから何でも好きに頼んでよ」

「総務省つて事は官僚の人か。嘘かし懐は暖かいんでしょね。俺等みたいな一般人と比べて」

「あはは、君もキリトくんと同じで容赦ないね」

悠の皮肉気の言葉も菊岡は笑顔で受け流す。和人はその手の皮肉はコイツには効かない、とでも言いたそうに肩を竦める。

「まっいつか。本当に何でも好きに頼んでいいんですね？」

「勿論さ」

菊岡の言葉に悠は目を輝かせながらメニュー表を眺める。値段はどれも高く安いのも1200円と手を出すのも渋ってしまう。しかし菊岡の言葉によって悠は渋る事も躊躇いもない。

「んじゃー、まずはコレにコレとコレ。あとコレとコレ……まだ頼んで見たいけど一旦、コレぐらいにしとくかなあ。あ、飲み物はミルクティーで！」

メニューの名前が長く一々言うのが面倒臭がった悠はメニュー表を指差しながら割と値段の高い物ばかり頼む。精々、2つか3つ位頼むんだろうとタカを括っていた菊岡は悠のオーダーの数に思わず飲んでいたコーヒートを嘔き出してしまった。

ウェイトレスは一瞬、目をパチクリとするも直ぐに、かしこまりました！と言い店の奥に行った。

「6つで一万超えたぞ」

「銀座のケーキなんてそうそう食べないからなあ。飽きるぐらいご馳走になろう。そう言えば、この店って持ち帰り出来んのかな？」

「おい菊岡さん。今からでも止めさせた方が良いんじゃないか？」

「だ、大丈夫だよそれぐらいなら。き、気にしないで頼んでいいよ」

そう言う菊岡だが、どこか声が震えていて口元が引き攣っていた。そんな菊岡なんて梅雨知らず、悠はウェイトレスが持つて来たケーキを美味しそうに頬張っていた。

「いやー、流石官僚様は懐が暖かい。どうやらこの店って持ち帰りOKっぽいしキリトもどれか持ち帰りでもしたら？直葉ちゃんやアスナにも持つて帰ってやつたらどうよ？」

「それもいいな。でも先ずは今日来て貰った話をしないか？」

「そうだね。食べながらで良いから聞いて欲しい。中山悠くん、キリトくんから聞いた

が、キミはGGOをプレイしているのは本当かい？」

菊岡の質問に悠はキーキを咀嚼しながらコクリと頷く。

「じゃあ、死銃やデス・ガンと言う言葉を聞いた事は？」

「……噂程度には。GGOの首都、グロツケンじゃ一部でその話が持ち上がってますよ」
一旦食べる手を止めて悠は正直に答える。噂ではグロツケンにある酒場でMMOS
トリームが中継されてる中、1人のプレイヤーがテレビ画面に映っているGGOプレイ
ヤー、ゼクシードに向けて銃を発射。その瞬間、回線が切断されてしまい以後登場しな
くなった。その際、銃を撃ったプレイヤーは酒場の客に向けて死銃、デス・ガンと叫ん
だと悠は聞いた内容を菊岡と和人に話す。

「うん、僕が知ってる内容と酷似してるね」

「んで、そんな噂を確認する為に態々俺を呼び出したんすか？」

「問題はここからだ。そのゼクシードのプレイヤーが亡くなった死因は心不全でね」

「ここですのような話じゃないだろうとキーキを頬張りながらジト目で睨みつけるも
菊岡は笑顔で返す。

「偶然じゃないんですか？」

「キリトくんも同じ事を言ってたよ」

悠は隣で座っている和人をチラリと見る。和人は既に知ってるのか他人のフリをし

ながら黙々とケーキを食べ、コーヒーを飲んでいる。

「でもね、もう一件あるんだ。GGOの有カプレイヤー、薄塩たらこと言うプレイヤーも同じ心不全で亡くなってるんだ。」

彼はその時、グロッケンの中央広場でスコードロンの集会に出てたらしい。その時、壇上で檄を飛ばしていた最中に乱入してきたプレイヤーに銃撃された。そしてゼクシード氏を撃つた時みたいに死銃とデスガンと言ったとのことだ」

「それは初耳だ……。それで？俺を呼んだ理由はなんなんですか？」

聞いていて気分の良い話ではない。悠は若干、苛ついた様子で問いかける。

「キリトくんとも昨日話したが、アミユスフィアはナーヴギアのように強力な電磁波発生しない。そしてアミユスフィアから送られてくる感覚信号でも無理だと結論付けた」
菊岡の話聞いて、昨日もこの場所でその話をしたのか、とどうでもいい事を考える。そしてウエイトレスがあからさまに嫌な顔をした事も納得した。

「なら、どうして2人は亡くなったのか解らないんだ。デスガンと呼ばれるプレイヤーに撃たれて立て続けに心不全で亡くなったとなると偶然とは思えない。」

だから昨日、キリトくんからGGOにダイブしてデスガンと接触して欲しいと頼んだんだ。そしてキリトくんからキミがGGOをプレイしていると聞いてね。

キミを呼んだ理由はキリトくんと一緒にデスガンと接触して出来るだけ情報を集め

て欲しいんだ」

菊岡の話聞いて悠は和人を睨み付ける。和人も申し訳ないと思ってるのか冷や汗を流しながら視線を合わせようとしない。

「正気か？なんでそんな危険な事をしなきゃなんないですか？そう言うのは大人のアンタ達がやるべき事じゃないんですか？」

「キミの言う事は御尤もだ。だが、デスガンはターゲットを選び好みする傾向があるようでね。ゼクシードと薄塩たらこは何方も名の通ったトッププレイヤーだった。つまりは強くないと歯牙にもかけてもらえない。

でも、攻略組として破格の実力を持つキミ達ならデスガンも興味を持つてくれると思うんだ。勿論、タダだとは言わない。調査協力費としてGGOのトッププレイヤーが月に稼ぐと言う額と同じだけ出す。

キリトくんにも言ったが銃撃されろとは言わない、キミ達の見た印象で判断してくればそれでいい」

「調べた結果、アンタの望んだ物じゃなくても文句言わないくださいよ？」

「そこは気にしないよ。ただ、些細な事でも良いから気付いた事は逐一報告して欲しい」悠は溜息を吐くと菊岡に了承の言葉を言い連絡先を交換する。その後、程なくして帰る際にテイクアウトで2箱分のケーキを注文。菊岡は乾いた笑いを上げながら財布の

中にいる諭吉3人と別れを言う。

「キリト乗ってけよ。家まで送るから」

和人はバイクを持つてるが高校の制服姿から帰りは電車だろうと思ひ悠は誘う。時刻は既に日が暮れて街灯が灯っている。会社帰りの人達と鉢合わせになつて揉みくちゃになりたくなかつた和人は悠の好意に甘えて車に乗つて菊岡と別れた。

「にしてもキリトはなんで総務省のお偉いさんと知り合つたんだ？あの人もSAOを？」

車の運転中、前を見ながら助手席に座つてる和人に聞く。悠の質問に和人は首を横に振る。

「いいや、アイツは生還者^{サブバイパー}じゃない。あの事件の対策チームを務めていて、俺が目覚めて最初に訪れた奴だ」

視線は前を向いているから表情はわからないが口からは嫌そうな声音が聞こえる。和人は菊岡から調書受ける際に悠や他の人達の安否を聞いた。その時に規則を破つてまで聞いて菊岡に借りを作つてしまった為に時折、VR絡みの調査を菊岡から請け負つていた。

「なるほど……。それで俺は巻き込まれたと」

「うっ、すまないとは思つてる。でも他に頼れる奴が居なかつたんだよ。アスナを連れ

てく訳にもいかないし」

「おいこら、地味に惚気いらんな。そして俺を道連れにすんなよ。クライン誘えクライン」

「……頼りなさそう」

「肉盾にはなる」

クラインこと遼太郎が聞いたらギャーギャー喚きそうな会話だが、冗談で話してる2人は声を押し殺して笑うと真面目モードになる。

「デスガンは強い奴をターゲットにするとは言ってたけどどうやって探してくか。虱潰しに探すなんて出来ないし」

「いや、もしかしたら接触だけなら上手くいくかもしれないぞ?」

悠は今週の土日にもB O Bが開催される事を伝える。

「もし本当に強い奴をターゲットにしてんならデスガンは大会に出るはずだ。俺も出るけどお前は どうする?」

「無理に誘った手前、俺も出場するさ。コンバートするからステータスは問題ない」

「金はどうすんだよ?」

コンバートで引き継ぎできるのは経験値と一部のスキルのみで別のVRゲームのお金や武器は持って行く事が出来ない。悠は最悪、ルタオの金から工面しようと言おうと

したが、その前に和人が口を開く。

「それは自分でなんとかするさ。GGOの雰囲気慣れるついでに金も貯めてくさ」

和人はそう言うものの、実際にGGOにダイブ出来るのはB o B予選開始日当日になるのは知らない。

暫くすると桐ヶ谷家に到着。和人を降ろすと悠は挨拶を済ませて自宅に帰宅する。

「あつ」

「おつ」

マンションに着いて部屋に入ろうとしたら隣人の香蓮とバツタリ出会す。4月の邂逅から気軽に会話するぐらいの仲になったって最初は苗字呼びだったのが、今では名前呼びになっている。

「今日は遅かったんだね」

「友人と会ってたから」

友人と言う単語が聞こえた瞬間、香蓮の表情が暗くなる。東京に来てから出来た友人は悠ぐらいしかない。

「あー、そう気にすんなって。まだ大学生活はあるんだ。その間に気の合う友人の1人や2人は見つかるって。……そんなしよげてる奴はこれでも食べてなさい」

悠は菊岡からご馳走してもらったケーキ箱の1つを香蓮に渡す。

「友人の知人から頂いた物。確か、香蓮ってお姉さんとかいるんだろ？その人達と美味しく食べちゃいな」

「え、いいの？」

「いいのいいの。銀座の喫茶店のケーキなんだけど、なまら美味かった」

「じゃーなー、と言うと悠は香蓮の返事を聞かずそのまま部屋に入って行く。入るなり悠は買ってもらったケーキを冷蔵庫の中に入れベッドにダイブする。ゴロゴロと転がりながらベットのの上にあるアミユスフィアを装着すると、リンクスタート、と眩きGG Oに誘われる。」

「デスガンの事は取り敢えず置いとくとして、今はB o Bに向けて準備する事を優先にする。」

（そーいやレンは今日いるんだらうか？）

特に約束してなかったが、出会って数ヶ月。スコードロンを組んだから当たり前のように一緒にいる相方の事を考えているとグロツケンにあるマイホームに居たのだった。

BOB予選当日

BOBの予選当日、ルタオは予選会場である総督府に向かう。

「ルタオさーん」

「ん？」

総督府の入り口に入ろうとした時に背後から自分を呼ぶ声が聞こえて振り向く。声をかけたのはローブ姿の小柄なプレイヤー。顔もフードで隠してしまっていて見えないが、ルタオを気軽に呼べる程の仲の良いプレイヤーは一人しかいない。

「……っあ」

此方に小走りで作って来たプレイヤーは途中、段差に躓いてしまい倒れそうになる。

「ふーむ、つい助けちゃったけどVRの中じゃ擦り傷出来るわけじゃないし、街の中ならHPも減る事ないから助けなくて転んだお前さんを指差して笑ってやれば良かったか、レン？」

「ありが……ってそんな事言われたら素直にお礼言えないよ!？」

転ぶ前にルタオは自慢のAGIで転ぶ前に抱える。その際に顔を隠していたフードが捲れ可愛らしい顔のレンが見えてきた。砂漠でPKをし過ぎたレンは報復行為を恐

れて街中を歩く時はロープで全身を隠して歩いている。

「んで、どうした？今日はB o Bだからフィールドに出れんぞ？」

抱えていたレンを降ろすとルタオは尋ねる。

「うん、知ってるよ。だから今日は応援しに来たの」

フードを被り直して再び顔を隠しながらレンは言う。

「そしてルタオさんがポカやらかしたら次会う時に弄ってあげよう」と

「ほーう随分面白い事を言うじゃないか、お子ちやまのレン？」

「ぎゃー！痛い痛い!!」

レンの言葉にルタオは笑顔で頭をグリグリする。側から見たらこの2人は仲のいい兄妹のように見えて周囲の人達は微笑ましく思えるだろう……普通なら。

「……けっ、見せつけてんじゃねーよ」

「俺らへの当てつけかよ」

「パルパルパルパル……」

G G Oは極端に女性プレイヤーが少ない。従って2人の遣り取りが普段なら微笑ましく見れるのだが、ここでは嫉妬の視線で溢れかえっていた。

そんな周囲の視線など気にもしない2人は一頻り巫山戯合った後、総督府の中に入って行った。中に入ると建物内の奥にあるエレベーターに入り地下20階を目指す。

「まるで映画館みたいに薄暗い」

「ポップコーンの匂いはしないがな」

地下20階に到着するとそこは半球型のドームになっていて照明は所々に設置されて申し訳程度にしか光を放っていない。

壁際に備え付けられたテーブルやこのフロアーを支える鉄柱にたむろするプレイヤーはいるが酒場のように陽気に騒いでる者は誰一人としていない。

むしろ、やって来るプレイヤー達を警戒したり、値踏みしたり、ほくそ笑むんだり、挑発したりして遠巻きに観察している。

（キリトの奴は……いないな）

周囲をキョロキョロと見回してかつての戦友を探すも見つからない。……と言ってもルタオが想像しているキリトはSAO時代の容姿。最近のVRゲームのアバターのスタイルはランダム生成されるので必ずしも似た姿になるとは限らない。

「……アイツしつかり来てんだろうな」

思わず小さく呟く。人を巻き込んでおいて自分はバックレるなんて事した際は菊岡の時以上に銀座のケーキをご馳走になろうとルタオは企む。が、直ぐにかぶりを振る。キリトに限ってそんな事するはずがない。どうせ、ギリギリになってやって来るんだろうと考えキリトを探すのをやめた。

「おっ、ビビってるの?」

ふと隣に一緒にいるレンを見る。レンはまるで空腹に飢えた猛獣の中に迷い込んだ小動物のようにおどおどしながら引つ切り無しに周囲を見回す。その姿にルタオは可笑しそうに笑っておちよくる。

「だって、皆怖そうなんだもん」

ビクつくレンを見てルタオはクスクスと笑う。それを見たレンはムツと頬を膨れるとルタオが空いている席を指差す。その行為の意味を理解したレンは激しく首を縦に振って空いている席に向かい座る。

座る前にルタオはストレージからローブを羽織ってからレンと対面するように座った。

レンがウインドウを開いて飲み物を頼んでる最中、ルタオはストレージ操作をしてローブを羽織ったまま戦闘服に着替える。

「はい、飲み物」

「サンキュー」

レンから飲み物のコーヒーを受け取る。

「予選頑張ってね」

「モチのロン」

そう言い合うとコップを合わせあい飲む。

「にしてもお調子者ばっかだな」

「どう言うこと？」

意味がわからないといった感じのレンにルタオは周囲の人を見回すよう言う。レンは目を凝らしながら離れた所にいるプレイヤー達を見つめる。

「……よくわからないよ？ 凄そうな腕の人達が銃を持って待ってるだけに「それ」へ？」
「試合開始までまだ時間があるにも関わらず銃を見せつけてる。そんなの自分はこれで戦いますよ、だから確りと対策してくださいってアピールしてるようなもんだ」

ルタオの言葉にレンはなるほど頷くも、何か疑問に思ったのか姿勢良く手を挙げる。

「はい、質問です！ み…親友がALLOやってるんだけど、話を聞いてるとALLOの街じゃ多くの人達が武器をぶら下げて歩いてるって言うってたけど、親友の話じゃ当たり前みたいだったよ。だからコレも同じじゃないの？」

「ふむ……GGOは銃が主流だろ？ 銃には種類によつて有効射程が違う。それは理解してるな？」

レンは頷きながらアイステイーを一口飲む。

「でもってALLOの主流は剣や槍といった近接武器だ。武器によつて間合いは違うけど

見せても対して変わんない」

そしてゲーム性の違いもある。GGOはガツチガチのPK推奨ゲーム。仲間でもないプレイヤーに武器をぶら下げて見せびらかしていると瞬時に武器を特定され対策・キルされやすい。しかもGGOの武器は装飾が少なく形状がわかりやすいので下手すればステータスまで暴露させてしまう。

対してALOはPK推奨ではあるが、どちらかと言うと協力型のゲーム。

特に最近の傾向では以前のような種族間での抗争は鳴りを潜めていて複数の種族が集まってパーティーを組みダンジョン攻略が主流となっていてPKの危険度は低くなった。しかもALOの武器は見た目だけで判断しづらい。同じダガーでもSTRよりだったりDEXだったりする事がある。

ALOでは遠距離に魔法もあるが、GGOのように倍率スコープを装着させたライフや狙撃銃のように必要な物を揃える必要はなく、詠唱さえ唱えれば誰でも離れた位置から魔法を放つ事が出来るから戦闘スタイルがバレてもダメージはこちらの方が少ない。

「あくまで俺の考えだけだな。中には敢えて使わない銃を見せびらかして偽情報を与えようとする奴もいるけど……ストレージの容量を圧迫する行為だからあまり良い策とは言えないな」

「うん、ありがとう！……それにしてもルタオさんって緊張してないの？いつも通りって感じだけど」

「いやいや、こう見えてもなまら緊張してるんだわー。心臓バクバクだー」

「うん、あからさまな棒読みだね」

そう言つて笑い合つてると不意に「ついてこないで」「で、でも」と言い争つてる声が聞こえ、2人は揃つて通路を見渡すとデザートカラーのミリタリージャケットを着た水色の髪をした女性とその後を追っている長髪の黒髪に服装も全身真っ黒なプレイヤーがいた。

「シノンじゃん」

水色の髪をしたプレイヤーを見た瞬間、ルタオは彼女の名前を呼ぶ。するとシノンと呼ばれた女性はギロリと睨みつける。

「なんだアンタね」

「試合前になーにをカッカしてんだか。どうよ？試合前に一杯やつとかない？」

シノンと呼んだプレイヤーにルタオは陽気に話しかけながらコップを見せる。これからB O Bに出場する選手とは思えない行動にレンは苦笑い。シノンも何か諦めた様子で黒髪のプレイヤーの方を振り向く。

「最低限の事だけ説明しておく。その後は本当に敵同士だから」

シノンの言葉に黒髪のプレイヤーは助かったような表情を見せる。ルタオが誘ったことでレンは融通を利かせてルタオの隣に移動していた。その事でシノンはレンのいた場所に座り黒髪のプレイヤーがその隣を触るのだが、2人の間にはあからさまな空間があった。

「この人の事知ってるの?」

「水色の髪のプレイヤーはね。名前はシノン。レンと会う前に2回ぐらいパーティー組んでプレイした事がある。凄腕……つと多分大会出場するだろうからプレイスタイルは見てからのお楽しみって事で」

黒髪のプレイヤーにB o Bのルールを説明してるシノンの傍でルタオはシノンの紹介をする。

「アンタ達も出場するの?」

「俺はね。このちびっ子はレン。最近、スコードロン組んで一緒にプレイしてる。今日は俺の応援で来てくれたんだってさ」

「初めまして。レンです」

「ふふ、よろしくね」

レンに向けて優しく微笑んでそう言うときシノンはジッとレンを見ると視線をルタオに移す。

「ねえ、ここ最近聞かなくなっただけで砂漠フィールドに現れる謎のPKプレイヤー知ってるわよね？」

「聞いた事あるよー。俺も怖くて砂漠フィールドに行けないんだよねー」

「そう。じゃあ、この世界の空って大気組成が狂ってて常に空が赤いのは知ってるわよね。砂漠フィールドも砂の色がくすんだピンクのような色なのよ」

「あーそうなんだー。それは初耳だー」

シノンの言葉にルタオは適当に返事をする。対するレンは嫌な汗がダラダラと顔中流れシノンと視線を合わせないようにする。ローブからはピンクの服が見え隠れしていて、シノンはそれをジッと見ていた。

「改めてよろしくね。『ピンクの悪魔』さん」

レンの様子を見て確信したシノンは悪戯っぽい笑みを浮かべながら言う。

「えっと……あの……」

「安心しなさい。他人にバラしたりしないから。ただ……フィールドで出会ったら容赦はしない。……いいわね？」

「はい！肝に命じますー！」

「よろしく」

レンの言葉を聞いたシノンは満足そうに頷くと鋭い視線でルタオを見る。

「アンタは何処のグループ？」

「C。そつちは？」

「私達はFよ。……と言う事はアンタと当たるとしたら本戦ね。その時は覚悟しときな
ゃー」

……殺してあげるから。

シノンは優しい笑みでも悪戯っぽい笑みでもなく、獰猛な笑みを見せながらルタオに
向けて宣言する。リアルで殺す宣言されれば物騒で最悪警察沙汰になるが、この世界で
は売り言葉や挨拶のようなもの。

所謂、おい決闘デュエルしようぜ、ぐらい気軽に飛び交う言葉である。だからルタオは……

「上等だ。返り討ちにしてやるよ」

目くじらを立てる事無く不敵に笑って返す。

菊岡の頼みでデスガンと接触しなければならぬが今のルタオはそんな事微塵も考
えていない。強敵相手に自分の腕がどれだけ通用するか子供のようにワクワクしてい
た。

SAOはデスゲームの所為でプレイヤー同士、決闘モードで戦う事はあっても、本気
で戦いあう事はまずなかった。だからガッツリPK推奨ゲームであるGGOは凄く新
鮮で楽しいとルタオは思っている。

「あのー。ところでさっきその人とシノンさん、何か言い争ってるように見えたんですが何かあったんですか？」

シノンとルタオのやり取りに耐え切れなかったのかレンがおずおずと聞いてくる。するとシノンはあからさまに不機嫌そうな表情でこれまでの事をざっくり説明を始めた。

曰く、黒髪のプレイヤーことキリトが道に迷っていた。そこへ偶然通り掛かったシノンがキリトの事を女性と勘違いしながら武器店に案内したり、総督府に案内した。そして2人で更衣室に入って戦闘服に着替えようとしたらキリトが男と発覚。今に至るとの事だった。

「おまわりさん」

「はいはい、通報にあった変態はその女装野郎だな？」

「ちよつと待ってくれ!!」

「「黙れ変態」」

「……はい」

キリトは3人に睨まれ萎縮する。待ってくれと言ったキリトだが、誰がどう見ても自分に非があるので強く出る事が出来ない。

「つーか、キリトって俺の知ってるキリトだろ？黒の剣士のキリトだろ？お前何してん

の？B o B 出場するって言ったのに開催日当日が初ログインとか舐めてんの？

しかも挙げ句の果てにシノンにセクハラとか……アスナにチクっていい？と言うかチクる」

「待つてくれ！いや、待つてください、お願いします！」

キリトはルタオに向けて全力の土下座をするもルタオはゴミを見る目でキリトを見る。

「アンタ、コイツと知り合いなの？」

「リアルで知り合い。いや、アスナ達に知られたらお前どうなるんだろ？ね？ね、どうなるか教えて？」

「……殺されます」

「だよー。楽しみだなあ」

愉悦するルタオにキリトは顔を青褪めさせながらガクガクと震える中、レンもシノンも助け船を出すつもりはなく他人のフリに徹していた。

ルタオはこのまま予選開始までキリトを誘ろうと決め込んでいたら此処に近づいてくる人影があった。

「やあ、遅かったねシノン。遅刻するんじゃないかと思って心配したよ」

そのプレイヤーはダークグレーの髪に直線的な迷彩柄の服を着ている男性プレイ

ヤー。どうやらシノン用があつたらしく、良く言えば気軽に、悪く言えば馴れ馴れしい感じで声をかけた。

「こんにちは、シュピーゲル。ちよつと予想外の用事で時間取られちゃつたの」

シノンが微笑を浮かべながら男性をシュピーゲルと呼び応じる。このやり取りを見ていたルタオとレンはそれなりに仲が良いんだと思いつながら2人の会話を聞く。

「どうやらシュピーゲルは大会に参加せず、シノンの応援にやつて来たとのこと。」

「そちらの人はシノンのお友達さんですか？」

見た目とは裏腹に礼儀正しく対面して座っているルタオとレンに尋ねる。

「違うわ。そっちの青いのは以前、数回だけ一緒にプレイしたってだけの奴、名前はルタオよ。その隣に座ってる子はあなたと同じ応援しに来た子ですって」

答えたのはシノンでルタオとレンはペコリと会釈するとシュピーゲルは律儀に会釈し返す。

「……ところでその女性は どうして土下座をしてるの？」

言い辛そうにしながらも好奇心が勝ってしまったのか思わずシノンに尋ねるシュピーゲル。

「騙されないで。男よ、そいつ」

「えっ」

シノンの言葉に目を丸くするシュピーゲル。レンとルタオは間違っていないと肯定の意味で首を縦に振る。

「あー、キリトと言います。男です」

「お、男……そのアバターで？」

キリトの自己紹介に依然として信じられないと言った表情をするシュピーゲル。そんな時、騒々しいエレキギターによるファンファーレが轟き、続けて合成音声のアナウンスがこの階全体に響き渡った。

『大変長らくお待ちせしました。ただ今より第3回バレット・オブ・バレット予選トーナメントを開始いたします。エントリーされたプレイヤーの皆様はカウントダウン終了後にフィールドに自動転送されます。幸運をお祈りします』

アナウンスが終わったと同時に待つてましたと言わんばかりに拍手と歓声が沸き起こる。ルタオは飲み物を一気に飲み干すと立ち上がりロープを剥ぎ取る。

「んじゃ暴れてくる」

「うん、頑張つて！」

ルタオがそう言うのと拳を合わせる。そしてキリトとシノンの方に向き直る。

「お前等はしつかり勝ち残つて本戦に出ろよ。そんで俺の経験値の肥やしになれ」

「面白いジョークね」

ルタオの売り言葉にシノン是不敵に笑う。

「ルタオ」

そんな中、キリトは真面目な顔でルタオを見る。わかつてるな？と目で訴えているように感じたルタオは手をヒラヒラと振ると光に包まれてフィールドに転送された。

予選開始

BOB予選が始まり、フィールドに転送された場所は一面真っ黒な空間だった。ルタオの前には薄赤いホロウインドウがあつて上部にはルタオVSヒロインXと表記されていた。

「……………さつてと」

この場所は戦闘準備時間として1分間設けられている。ルタオはウインドウを開くと愛銃のヴァリアントザッパーを2丁取り出しホルスターに収める。そして更にウインドウから野球ボール程の大きさのグレネードとプラズマグレネード数個を取り出してポーチに入れる。

「……………キリトの奴本当に大丈夫なんだろうな」

残った時間キリトの心配をするルタオ。まさかの大会当日に初ログインするとは思わなかつたと溜息を漏らす。

「……………いや、今は俺の心配だな」

他人の心配をして自分が予選敗退なんて笑えない。ルタオは深呼吸をすると表情を引き締める。

ここから先はフィールド。何処に誰がいるかわからない。油断すると死ぬ。ここをアインクラッドの迷宮区だと思え。敵は俺を殺す気にいるぞ。

ルタオは口には出さずその思いを何度も反復させて言い聞かせる。そして時間になるとルタオはフィールドに転送された。

☆☆☆☆

ルタオ達が転送されてからレンはアイステイーを飲みながらポツンと席に座りながらホールに映されている予選映像を見ていた。

シュピーゲルはシノンが居なくなると用は無くなったと言わんばかりにそそくさと退散してしまった。コムユ障のレンとしては見知らぬ人と一緒に観戦するなんて到底出来ないで、シュピーゲルが去ってくれてよかったと安堵しながらレンはアイステイーを一飲み、ルタオが映されてる画面を探し出す。

総督府の前ではルタオが負けたら擲揄うと言ったレンだが、そのつもりは毛頭ない。予選敗退してしまったら、その時はわたしが御馳走して励ましてやろうと決心するレン。

「……………あつ」

画面の1つにルタオが映っていたのを見つけて凝視する。画面越したが、彼の雰囲気は普段のおちやらけてる物ではなく、真剣そのもの。

「そう言えばルタオさんの戦うところって初めて見るかも」

普段はレンの経験値稼ぎを優先としてるため、ルタオは周囲警戒や指示を出したりしている。なので、こうしてルタオの戦闘をマジマジと見れるのは新鮮だと思いながら、画面を見つめルタオを応援するのだった。

☆☆☆☆

ルタオが転送されたフィールドは鬱蒼とした森林地帯。茂みで視界が悪くて相手の位置が判別しづらい。ルタオはまず、大きな木に隠れてしゃがみ込む。

「……スウ、ハア」

1つ深呼吸を入れるとゆっくり瞼を閉じ、集中する。SAO時代、キリトとよくシステム外スキルを開発していた。

武器の脆い部分に一定の角度で命中させることで破壊させる、武器破壊スキル。

背景音と動作音を聞き分ける、聴音スキル。

生物型のモンスターは攻撃の前に攻撃する方向を見るアルゴリズムとなっていて、目の動きで攻撃される場所を特定し防御や回避を行う、見切りスキルなどがある。

PKが多発しているGGOではシステム外スキルは重宝している。ルタオは自身で編み出した、ゾーンを発動させる。

スポーツ選手達が極限の集中力に達するとパフォーマンスが向上したり、五感が敏感

になると言われている。SAO時代、フロアボスとの戦闘で偶然、ゾーンに入る事に成功したルタオは以後、自発的にゾーンに入る術を見つけ出した。

ゾーン状態で五感が敏感になった状態だと聴音スキルが格段に向上する。ルタオはその状態で聴音スキルを使用し、周囲を索敵する。

「……みつけた」

聴音で索敵してみた結果、こちらに近づいてくるも足音は動いたり止まったりを繰り返している。

「……これだと、まだバレてないな」

恐らく周囲索敵をしつつ、こっちに寄ってきてるだけだろうと結論づけたルタオは取り敢えず木の上に登って高い位置から相手プレイヤーを観察する事にした。

双眼鏡で特定した方向を観察していると周囲を見回す青色の服装をした女性プレイヤーを発見する。青いキャップ帽子に軽装の青い服、首には青いマフラーを巻いていて手にはフォトンソードにハンドガンを持っている。たぶん、自分と同じAGI型のプレイヤーだろうと考察する。

「……………」

無闇に突っ込めば、フォトンソードで振り返ちに遭うだろうと考えるルタオ。フォトンソードはこの世界にある数少ない剣の中で最強を誇る武器。ルタオの持つヴァリア

ントザッパーで罅迫り合いなんてやろうものなら、バターみたいに溶けて壊されてしま
う。

「……フツ」

でも、そんな心配はルタオにはない。相手が剣使いだと俄然、負けるわけにはいかな
い。

「斬れるもんなら斬ってみろ」

誰が聞いているでもない。でも眩いてしまう。目視で確認出来たらルタオはヴァリア
ントザッパーを持ち引き金に指を添える。すると、銃口から赤い線、弾道予測線バレットラインが表示
される。

「むっ、そこかー」

しかし、弾道予測線は銃を向けられた相手のみにしか視認されない。だから、ルタオ
が隠れて銃を狙っても、ラインが表示されれば隠れても意味がない。

相手プレイヤー、ヒロインXは弾道予測線を視認するとラインの先を睨みつける。ヒ
ロインXはラインが自分に重なってない事を確認すると、その先にいるルタオの所に駆
け出す。

そんなヒロインXに目もくれず、ルタオは引き金を引く。弾丸はラインに沿って放た
れ、ヒロインXに当たらず近くにある木に目掛けていく。

ヒロインXには当然当たらない。本人もそう思ってルタオの方を指していたのだが突然、左肩に痺れる感覚が走る。

「なっ!?!」

HPバーを見てみるとジワリとだがHPが減っていて、左肩には被弾エフェクトが煌めいていた。目の前にいるはずの敵に、どうして背後から撃たれたのか分からずヒロインXは困惑してしまう。

「どうやって……まさか、チート行為!?!」

そう叫んだ瞬間、目を見開いてしまう。自身の周囲にある数本の木に弾道予測線が表示されていて、その木から屈折して弾道予測線はヒロインXに向けられていた。

「これは……跳弾」

跳弾スキル。本来、意図的な跳弾のコントロールにより目標に命中させるというのは実弾では不可能だが、GGOの中ではそれがスキルとして可能となっている。相手の死角から不意打ち出来るという長所はあるが、威力が下がってしまうこと、入射角と反射角を考えて撃たないとならない欠点があつて初心者には向かないスキルとなっている。

ヒロインXの体中に予測線が照らされている。避けようと身体を動かすも全弾躲すことなどで出来ず、微弱だが確実にHPが減っている。

ルタオはトドメを刺すべく、弾道予測線を相手プレイヤーに向けながら素早く距離を

詰める。

「舐めるな!!」

ルタオがヒロインXの正面に現れると吠えながら、フォトンソードを振るおうとする。ルタオは減速せず、逆に加速して更に距離を詰め、フォトンソードを持つ手を掴む。そして、ヴァリアントザツパーで躊躇なく腕ごと切り落として一気にHPを減らす。

「させない」

ヒロインXはもう片方の手でハンドガンを持ち、撃とうとするもルタオは切り落としたフォトンソードでもう片方の手も切り落とす。

両手を失ったヒロインXは逃げようと踵を返そうとするも、時すでに遅し。

「……ガツ、ハツ……」

心臓にフォトンソードを突き刺し、首の頸動脈にヴァリアントザツパーで斬り裂いた。突き刺され、斬り裂かれた部分からはまるで血のようにエフェクトが煌めくと、HPは0となってポリゴン状に四散していった。

行き着く島もなくルタオを光で包むと次の瞬間には元いたホールに戻っていた。

「ルタオさん、おつかれ。凄かったね!」

「おう、サンキュー」

戻って来ると席でポツンと座っていたレンから労いの言葉を受けて間延びした返事

で返すとそのまま対面するように座る。

レンはウインドウを開いて何か頼むかと視線を送ってくるも、ルタオは首を横に振ってそれを断る。そして、そのままいくつもある画面に目を配り、キリトを探す。

すると円柱の柱の陰で情けなく隠れているキリトの姿を発見。どうやら、相手はアサルト・ライフルかマシンガンを使用してるようでキリトが隠れている円柱目掛けて容赦なくフルオート射撃で発砲している。

既にHPは4割以上削られていて、体には被弾エフェクトが無数に見えた。

「ねえ、あの人大丈夫なの？」

ルタオが誰の試合を見てるのかわかったのか、レンは尋ねる。

「さあ？見てればわかるさ」

尋ねられたルタオは肩を竦めてそう答えると映像では動きがあつた。円柱から現れたキリトの右手にはフォトンソードが握られていて、素早く敵の潜む位置へと駆け出し始めた。当然、相手は見逃すはずもなく、キリトの体には無数の弾道予測線が照らされる。

「はっ……えっ？」

レンは有り得ない物を見たような声を出して困惑する。そんなレンに揶揄うことをせず、ルタオはニヤリと笑みを浮かべる。

相手プレイヤーが銃弾を放ったが銃弾は1発たりとも被弾しなかった。それもそのはず。放たれた銃弾をキリトは寸分違わずにフォトンソードで遮った。その結果、銃弾は光の刃に弾けてしまった。

その行動にはレンだけでなく、相手プレイヤーも有り得ないと惚けてしまうも、直ぐに我に返って再度撃ち始める。しかし、その1発も当たる事なく、キリトはフォトンソードで塞いでしまう。

「まるでスターウォーズのワンシーンだな。黒い仮面でも着けさせたら完全にダースベイダーだろ」

ルタオは愉快そうに笑いながら映像を見る。恐らく、聴音で位置を特定して、見切りで予測線にフォトンソードを合わせて防いでるんだろうと考える。

戦闘は大詰めのように、キリトは射程内まで近づくとダツシユのスピードを余さず乗せた全力の直突きを放つ。それはSAOをやっていたれば多くの人達が見たであろう、片手剣ソードスキルのヴォーパルストライク。

システムアシスト無しで放ったその技は相手プレイヤーの胸板に突き刺さり、呆気なくポリゴン状に碎けて虚空に拡散していった。

「なるほどなるほど」

良いものを見せてもらったとルタオは上機嫌になる。

フォトンソードで銃弾を防ぐ事が出来ると言う情報を得たのはかなりデカイ。2回戦で余裕あれば使用して物にしよう、と決心する。

「多分、キリト来ると思うから隣いい?」

レンは頷くとルタオは移動してレンの隣に座る。すると案の定、その近くにキリトは転送されて来てルタオ達に気付くと疲れた様子でやって来た。

「余裕かましてた癖に随分とギリギリじゃないか変態くん」

「仕方ないだろ。色々あって、インでできなかったんだ。それにPVPは専門外で不慣れでやり難かったし。あと変態って言うな」

「そんな様子であと4回、勝てんの?」

ルタオの挑発にキリトは不敵に笑う。それに釣られてルタオも不敵に笑ってしまう。

「決勝まで上がってきたな。明日、キツチリと殺してやんよ」

「へえ、それは楽しみだ。今まで勝ち越せた事ないのでどうやって勝つつもりだ?」

「言うはずねーだろ」

互いに軽口を叩き会う。しかしその雰囲気も直ぐに一転する。

「おい誰だ、お前」

ルタオが突如、鋭い視線で問いかける。キリトは何を言ってるんだ?と言おうとしたが、ルタオの視線はキリトに向けられたものではなく、自分の背後を睨みつけてると気

付くと背後を振り向く。

そこに居たのはシノンでもシュピーゲルでもなく、全身ボロボロに千切れかかったダークグレーのマントを着ていて素顔まではわからない。そもそも目深に下ろしたフードの中には顔全体を覆う黒いゴーグルのレンズが赤く光っている事だけしか分ならず、性別すら判断がつかない。

只者じゃないと判断したキリトも警戒の色を濃く見せながら数歩距離を取る。

「おまえ達、本物、か」

しかし、そんなの御構い無しと言わんばかりに不気味なプレイヤーはキリトとルタオに向けて金属質な響きのある声で問い掛けた。

予選終了

「お前達、本物、か」

突如、金属質な響きのある声でキリトとルタオに問いかけた謎のプレイヤーに警戒を強める。先程までの空気が一転して一触即発とまではいかないが、居心地の悪さにレンは戸惑ってしまふ。

「本物って……どう言う意味だ？あんた、誰だよ？」

ぶつきらばうに訊き返すキリト。フードのプレイヤーはその問いには答えず、倍音の混ざった不快な声で喋り始めた。

「試合を、見た。お前、剣を、使った。そして、お前は、銃剣」

「だつたらなんだ？ルール違反じゃねーだろ」

ルタオは苛立った様子で返答する。BobはNo. 1を決める大きな大会。キリトみたいにフォトンソードのようなネタ装備を使用する人物は恐らく片指で数える程度しかない。

てつきり、真面目な大会でネタ装備を使うなどと言うブーイングかと最初は思ったが、その様子ではない。相手の意図が分からず、ルタオは思わず苛立ってしまう。

「もう一度、聞く。お前達は、本物、か」

プレイヤーはそう言うとういんどウを開いて生気の乏しい動きで操作を始めるとB
O B予選トーナメント、Fブロックのトーナメント表を呼び出すとキリトの名前を見え
るようにズームしキリトに見せる。

すると、次はBブロックのトーナメント表を呼び出すとキリトの時同様、ルタオの名
前をズームして見えるように操作した。

「この、名前。あの動き。……お前達、本物、なのか」

その瞬間、キリトの膝が震え、よろけそうになる。ルタオもこのプレイヤーは何が言
いたいかかわかった時、心臓を鷲掴みされた感覚に陥った。

このプレイヤーもキリトとルタオ同様、SAOプレイヤーだと理解した。唯一、話に
ついていけないレンはルタオの影に隠れながら、服を引っ張り説明を求めようとする
も、ルタオは構わず相手を見据える。

（多分……攻略組の奴等じゃねーな。誰だ、コイツは?）

ルタオは必死に過去の記憶を辿って相手プレイヤーの素性を思い出そうとする。

もし攻略組の誰かなら、こんな不気味な出で立ちで現れる事はないはず。気さくじゃ
なくても素性を明らかにしてやって来るはずだとルタオは考える。

「!……っ?!」

ルタオが相手の素性を探ろうと記憶を辿っていると、プレイヤーはウィンドウを消してマントの中に細い腕を戻そうとした時、見てしまった。

一瞬、青白い肌がチラリと覗き、その肌には数センチのタトウウが刻まれていた。西洋風の棺桶の蓋には気味の悪い笑みを浮かべた顔を描かれている。その蓋は少しだけずれていて、箱の中から白骨の腕が伸びて手招きしてるように見える。

ライン・コフィン
笑う棺桶、最低最悪の殺人ギルドのエンブレム。

そのエンブレムを見た瞬間、激しく動揺した。

(よりにもよってラフコフ……しかも幹部の野郎かよ)

人を殺したと言うデスガンがいるGGO内でラフィン・コフィンのメンバーがいた。ルタオはこれが偶然ではなく、コイツがデスガンじゃないかと決めつけてしまう。

SAOでは様々な殺人PKを行い、多くのプレイヤーを恐怖に貶められたコイツ等なら、ゲーム中に他プレイヤーを心不全にさせる手段を知っても可笑しくないとさえ思ってしまう。

「…そうだよ。お前の知ってる、青の双銃剣って呼ばれたルタオさんだよ。お前も相変わらずバカな事してるよなあ」

ラフィン・コフィンに弱みを見せれば、そこを付け込んで来る輩も多い。だからルタオは敢えていつもの様子で受け答えをする。

「……そうか、なら、覚えて、おけ。いつか、殺す」

「ならお前も覚えとけ。何時迄も好き勝手な事出来ると思ってたんなよ?」

「お前達に、オレ達を、止める事は、出来ない」

プレイヤーの言葉を聞いたルタオが不敵に笑う。

「ほほう? オレ “達” って言ったか? 他に誰が関与したんだ? ほれほれ、俺に相談してみろよ」

プレイヤーは何も言わずに一睨みすると踵を返してその場を離れていくと唐突に光に包まれて消えていった。

「ハアアアア、めんどアアア」

謎のプレイヤーが消えた瞬間にルタオはグデーっとテーブルにダレる。

「あの人だれ?」

ピリピリした空気が四散したと分かった瞬間、置いてけぼりにされてたレンがルタオに問いかける。

「GGOやる前にやってたVRゲームで出会った奴」

「確か……ALOだっけ?」

「そ。そのゲームでアイツ等のギルドが悪質プレーばっかして一度衝突した事あんだよ」

関係のないレンを巻き込むつもりも、SAOプレイヤーだと告げるつもりもなかったルタオは簡潔に答える。するとキリトは先程の威勢は見る影もなく、別の席に座って行った。

「アイツもその悪質プレーの被害にあつた奴でさ。散々酷い目にあつたらしいんだよ」
「ルタオさんも？」

「そーなんだよー。それで嫌になつてGGOに逃げ込んだのさ。慰めてくれる？
よしよしと頭撫でてくれてもいいんだよ？」

「セクハラで訴えるよ」

「おー、怖い怖い」

レンの言葉に両手を挙げて降参のジェスチャーを見せる。するとルタオの体が光に包まれ、次の試合が始まると示唆された。

「ほんじゃま、頑張つてきますかねえ」

「うん、頑張れ！」

レンの声援に片手を挙げると、その場から消えて行った。

その後、残り4戦を無難に勝ち終えたルタオ。2回戦からヴァリアントザッパーから光学、光剣の銃剣、クロスミラージュに装備を切り替えて、キリトが編み出した切り払いを多少手こずるも会得した。

一方のキリトは鬼気迫ると言いたくなるほどの捨て身特攻戦法だった。どの試合も切り払いで銃弾を防ぎ、ゼロ距離まで近づくと銃ごと相手プレイヤーを叩き斬る。その戦闘に観客達は、ネタ装備とか、どうせ直ぐに退場だ、などと中傷の言葉を投げかけていたが、一試合が終わる度に中傷は減っていき、本戦出場が確定した頃には中傷が無くなり、唾然とした様子で画面に釘付けとなっていた。

「あつぶねー、戦い方してんなあ。レンはマネすんなよー」

「うん、あんな戦い方絶対しない。と言うか出来ないから大丈夫」

先に本戦出場を確定してBブロック優勝を果たしたルタオはレンと一緒にキリトの試合を見ていた。

ラフィン・コフィンのメンバーと出会って動揺したキリトは、その不安を振り払うように戦ってるように思える。この調子だと明日は大丈夫だろうか、思わず心配してしまう。

ルタオ自身、ラフィン・コフィンのプレイヤーと出会って不安な気持ちはあったが……

「そう言えば、シノンさんってどんな戦い方するの？」

レンがこうして話しかけてくれるのは精神的に助かるとルタオは内心で呟く。レンが居なければキリトのように鬼気迫る感じで試合をしてただろうと考えるルタオはレ

ンの質問に記憶を辿らせてながら答える。

「一緒に組んだのは2回ぐらいだけど確か……スナイパーライフルを使って狙撃してたな。腕も確かでかなりのプレイヤーだった記憶はある」

そう言うとうFブロックの決勝戦が始まった。

「こりや、キリトの不利だなあ」

「このエリアだとスナイパーが有利だから？」

レンの言葉に肯定するように頷く。決勝戦のエリアは細長いエリアの高速道路。所々に廃車やヘリの残骸が置かれ、更には舗装面が斜めに飛び出しているが細長いエリアの為、キリトは一直線に突っ込まなければならない。

しかも、スナイパーは射撃において弾道予測線なしで射撃することが可能。したがって、廃車の影に隠れて移動しようにも下手したら1発で頭を撃ち抜かれてしまう恐れがある。

「見切りで防ごうにも予測線見えないときつついしなあー」

「普通はあんな方法で防ごうとは思わないからね」

ジト目で睨んで言うレンにルタオは口笛を吹きながら聞き流す。

そうこうしてる内にシノンは大形バスの2階に移動し伏射姿勢でライフルを構えていた。

「なまら、おつきいライフルだな」

「前にくれたKSVK…だっけ？に似てるよね」

「つて事はかなりの筋力値が要求されるライフルか。俺やレンじや到底、使えねーな。……つて、おいおい」

レンと話していたルタオは愕然とする。画面ではキリトが顔を俯かせながら隠れる素振りを見せぬまま、真つ直ぐ歩いていった。ついさつきまでの鬼気迫る様子など無く、無気力なもの。その様子はまるで……

「アイツ、この試合捨てる気か？」

B O Bの予選は各ブロックの優勝者と準優勝のみが本戦に出場出来る。だから無理に決勝戦に勝つ必要はないのだが、あの様にあからさまにヤル気のないのはマナーとして失礼だ。

「後で絶対にど突く」

苛立った様子のルタオは小さくそう言う。いくらラフィン・コフィンのメンバーと出会って動揺したからって、本戦に出場するのが決まったからって、やっていい事といかない事はある。ヤル気がなければ降参すればいい。しなければ真面目に戦う。PK推奨でルール無用だGGOでもマナーはある。

現にシノンも画面越しで何を言ってるのかは分からないが、叫びながら発砲をしてい

た。恐らく、キリトの様子を見て憤慨してるんだらうとルタオは考える。

普通ならもう試合は終わっている。が、シノンも動揺してしまったのか1発も当たらず、結果的に数十mまで近寄られる事となって、画面ではシノンまでもがキリトに近づいていった。

訳の分からない試合に萎えてしまったからか、それまで見ていた観客達も疎らになっていく。そんなの御構い無しに画面越しのシノンはキリトに怒鳴りつけている。

「何言ってるのか、すげー気になる」

「マイク機能ってないんだね」

「今ほど欲しいとは思った事はないな」

そんな事話していると試合に動きがあつた。互いに10mまで距離を取ると、シノンはライフルをキリトはフォトンソードを構え始めた。

「どうしてこうなったの?」

「俺にも分からん」

そう言った瞬間、キリトの手に握られていた銃弾が落ちるとシノンがライフルを撃つ。普通ならここで命中となつてキリトが負けると試合を見ていた観客達は思う。が、観客達の思っていたその結末は裏切られた。

「ええ……」

「……………」

レンは有り得ないと言う感じで眩き、ルタオは額を手で覆いながら笑いを堪える。キリトは僅か10mの位置からライフルの弾を斬ったのだ。そしてそのまま、シノンの首筋にフォトンソードを当てていた。

また暫く互いに話をしてしているとシノンが降参したらしく、キリトが優勝をした。

ルタオとしてもこの試合はいろんな意味で問いただしたかったので、戻ってきたキリトを早々に捕まえると個室に座らせ尋問しようとした矢先……

「あつ、もうこんな時間。ゴメンねルタオさん。今日はもう落ちるね！」

「おう、今日は応援に来てくれてサンキューな！出来れば明日もヨロ！」

「ゴメンなさい！明日は用事があるから応援に行けないや」

「そりゃあ残念。そしたら今度会う時に結果を教えるわ。きっと俺が優勝する事になるだろうけど」

「フラグってやつだね！そう言って開幕早々に撃ち殺されるんだね！」

レンはそう言うや否や逃げる様にログアウトして消えてしまった。

「んで、被告人。さっきの試合について言い訳はあるか？」

レンが居なくなるや直ぐにキリトの方に振り向き言う。

「お前の言いたい事はわかる。が俺もログアウトしたいんだが。ここじゃ誰に聞かれて

るか分からないし、話なら電話で聞くから」

「逃げられると思うなよ。ここ^{G.O.}にあるマイホームに行つて話を聞かせてもらおうぞ」

そう言つてキリトの襟を掴んで無理矢理移動を始め、マイホームでさっきの試合の経緯を聞いた後、明日のことを話していた。

「……取り敢えず、ラフコフの奴がデスガンだとして、どのプレイヤーなのかが問題だな」

「ああ。多分、奴も本戦に出るはずだ。絶対に見つけ出さないと」

「ちんたら出来ないぞ。ガチでラフコフがデスガンなら本戦で誰かを殺しかねない。それだけは何としても阻止したい」

そう話すも打開策が見つからず、結局明日の本戦で出たとこ勝負しかないとなつてこの日は解散となつた。

予選終了後

「…………ふう」

GGOから戻ってきた悠は気怠るそうにしながら頭に装着されてるアミユスフィアを外しベットから起き上がりながら、デスガンの事を考える。

「どうやって、アイツは人を殺したんだろう？素人目から見た考えでも仮想世界から現実の人を死に至らしめることなんて不可能だ。」

しかし、如何に考えでも結論に至る事はなく、思考を放棄して今日の事を菊岡に伝えようとスマートフォンを手に取る。

『やあ、こんな遅くにどうかしたかい？』

数コールすると通話越しからお気楽そうな菊岡の声が聞こえる。

「…………取り敢えず連絡をと思って」

『もしかして、もうデスガンと接触したのかい？いやあー、流石だね！』

能天気な声音に思わずイラッと来てしまったが、大きく息を吐いて落ち着くとテレビをつけながら報告をした。

「デスガンと思わしき人物です。本人と確認付けるものなんてありませんが、怪しい人

物をキリトと一緒に接触しました」

その言葉を聞くと尚も能天気な声音が聞こえてくるも、SAOプレイヤーの、しかもレッドギルド、ラフィン・コフィンに所属してたプレイヤーだと伝えると能天気な声音は鳴りを潜め、真面目な声音が聞こえてきた。

『それは本当かい？』

「ええ。ラフコフのエンブレムをつけてましたから確かです。1つ聞きたいんですが、仮想世界で現実の人を殺すのはどうやったって無理だと思うんですが……」

『それはキリトくんとも話してその結論を出してるよ』

菊岡ともデスガンがどうやって人を殺したんだろうかと話し合ったが、キリト同様に結論に達する事はない。

するとテレビのニュースで先月の中旬、東京都の〇〇総合病院の薬品保管庫から筋弛緩剤と注射器数本が盗まれた報道が取り上げられていて、病院関係者が記者会見を開いてる映像が流れていた。

(こう言う不祥事ってしょっちゅう聞くなあ……)

菊岡の話半分聞き流しながらテレビ映像の方に視線を向けているとふと頭によぎった。

「ねえ、菊岡さん。亡くなった人達に外傷とか無かったの？……例えば注射痕とか」

『前にも言ったと思うけど、犯罪性が薄かった事もあって精密な解剖は行われなくてね。調べたのも死因ぐらいいなものだけど、急にどうかしたのかい?』

菊岡の問いに、デスガンと思わしきプレイヤーが複数人を示唆した事、たった今ニュースで報道されてた事を踏まえて、現実で共犯者が自宅に侵入して弛緩剤の入った注射器で刺されたのでは、と悠は伝えると通話越しから唸るような声が聞こえてくる。『……なるほど、それは盲点だった。僕もキリトくんも仮想世界からの犯行しか考えていなかったからね。でも、それだとデスガンはどうやってゼクシード氏と薄塩たらこ氏の住所を突き止めたんだろうか?それに、現代の病院は薬品庫とか重要な場所は電子ロックで入念に保管されている。おいそれと住所も薬品も盗むなんて出来っこないよ?』

菊岡の指摘通り、其処がわからない。薬品はニュースで報道されてるから何らかの方法で盗まれてるのはわかっているが、住所をどうやって知ったのかわからない。

VRゲーム初心者ならついで、口を滑らせて住所を漏らしてしまうが、話によると2人はベテランプレイヤー。そんな凡ミス犯すはずがない。

それに、そんなタイミングよく犯行を行う事は可能なのだろうか?と新しい疑問に考え込んでしまう。

『でも、キミのお陰で一步前進した。明日にでも病院の方を調べさせる様にするよ』

「なるべく早くお願いします。多分、デスガンは明日の本戦に出るはず。下手したら、また犠牲者出すかもしれない」

『もちろん、解ってるよ。キミとキリトくんにも引き続きデスガンの事を探って欲しい。それと手配はこちらでしておくから、明日はキミもキリトくんと同じ場所でGGOにダイブしてくれ。キミの言った通りなら、自宅でダイブするのは危険だ』

「危険だと思うなら代わりに明日の本戦に出てもいいんですよ？特別にアカウント貸しますから」

『いや…ほら……。僕達はキミ達のような腕はないからね。デスガンと接触する前に敗退確定しちゃうよ』

頼りにならないと内心で毒突くも菊岡に届く訳もなく、数分会話した後切り上げて悠は今の会話をキリトにもしようとしたが、睡魔に負けてしまい横になるとそのまま眠りについた。

☆ ☆ ☆

『やつほー、コヒー。愛しのルタオくとやらの雄姿は？』

「愛しなんかじゃない。ただのフレンド」

『でも、私の知ってるコヒーなら男子と、それも見知らぬ人とそんな長く一緒に遊ぶなんて北海道こつちに居た頃じゃあり得なかったじゃん』

悠が菊岡と連絡を取り合ってるその頃、隣の住人である香蓮は地元の友人、篠原美優と電話で通話していた。香蓮は8月頃からVRゲームを始め、GGOでレンの名前で遊んでいる。悠も香蓮も互いにVRゲームをしているなんて事はもちろん知らない。

『それにコヒー、GGO始めてからルタオってプレイヤーの話ばつかじゃん。それかりアルだと悠…だっけ？その人の話を中心だし。』

ああ、あのお堅いコヒーにも春が来たんだと思うと私や嬉しくて涙が出るよ。今度、帰って来る時は赤飯炊いてあげるよ。十勝産の小豆をふんだんに使ったやつ』

「そんな関係じゃないから涙流す必要も無ければ赤飯炊く必要もない。……食べたいけど」

香蓮の最後の呟きに電話越しから美優の笑い声が聞こえてムツとしてしまう。其処で香蓮は美優がALOをプレイしている事を思い出して質問してみた。

「ねえ美優。青の双銃剣ってALOで聞いたことある？」

『なんじゃそりゃ？』

「ルタオさんがそう言ってたの。ALOでそう呼ばれてるって」

『コヒーよ。そりゃあ、あり得ないってもんだ。ALOには弓やボウガンはあっても銃なんて存在しない。』

と言うか、ルタオさんって名前、なんでそんな流行ってるの？』

「それどう言うこと?」

『今年の春頃からかな? ALOでルタオやキリト、アスナの名前のプレイヤーが増えたんだよ。名前の英文字のスペルはちーっと違ってたりしてりけど。』

其奴らに聞いてみたら、俺は英雄だ、弱い奴はすっこんでろ、だのと訳の分からん事ばかり言うんだ。まっ、そんな奴等、この美優様が1人残らずギツタギタにしてやったがな!」

美優の言葉に香蓮の頭はこんがらがる。一部の名前がそんなに流行る事なんてあるのだろうか?それにGGOで出会ったルタオの実力は素人目から見ても高く、弱くはない。

そんな思考を張り巡らせてると通話越しで高笑いを一頻りすると会話を再開させる。

『でもさー、そのプレイヤー達ってどいつもこいつもステータスは高そうだったんだよねー。VR慣れし過ぎてる感じでさ、みーんな素人じゃないんだよ』

「ふーん」

『ありや? 興味なさそうだね、コヒー』

「だってALOやってないし」

『そりゃあそうか。でも気をつけとけよ。コヒーは素直すぎるからお姉さんは心配だよ。コヒーって素直でたんじゅ…ゲフンゲフン』

一瞬、顔を顰めるも電話越しからは何かされたらハラスメントコードを押せだの、圈内ではHPは減らないがノックバックは発生するから相手が泣きじやくるまで攻撃の手を緩めるなどと物騒な発言が多々聞こえてきて、顰めた表情も苦笑い気味になってしまう。

その後、2人は一頻り話すと話題は2人が好きなシンガーソングライターの神崎エルザの話で盛り上がる。

コンサートのチケットが取れたら香蓮の部屋に泊まりに来るだの、その時は隣人を紹介させろだのと話題は途切れる事はなく、香蓮が寝たのは2時過ぎとなった。

☆ ☆ ☆

「……………」

朝の9時頃、悠はベットから起き上がり寝ぼけ眼のまま体を伸ばす。暫くボーっとしてると意識がだんだんと覚醒していき、行動を始める。

服を着替え、朝食の準備をしてる間に悠は昨日気付いた事をキリトに伝えようとするも、運が悪く電話に出る事は無かった。

「……………いやーないか」

BOBの本戦までに会えれば良いやと決めた悠はマツタリと朝食を摂りながら、ライオン・コフィン笑う棺桶について思い出す。

SAOにはHPを全損させてはいけない不文律があったが、それを破ったのがラフィン・コフィンのリーダー、POHというプレイヤーだった。

黄色いクマのような可愛らしい名前だと当初は思っていた悠だが、それも直ぐに訂正する事になる。

攻略組のトップと言われた血盟騎士団の団長、ヒースクリフ並みのカリスマ性を備えていたPOHは多くのプレイヤー達の価値感を染め変えてアウトローな集団にさせ、POHの元に集うようにしていった。

そして実力も攻略組とタメを張れる程の強さを持ち、悠やキリトは何度も冷や汗をかき思いをした。

そしてそのPOHの側近のようなプレイヤーが2人いた。1人はジョニー・ブラック。キリトと同じ黒ずくめで毒ナイフを好んで使用する男。実力はPOH程ではなかったが、ハイディングスキルが異様に高く、死角から毒ナイフを投げつけて動けなくなったプレイヤーからアイテムや金を奪ったり、殺したりしてPOH同様に手を焼かされた記憶がある。

「……もう1人って誰だっけ？」

しかし、後の1人が思い出せない。ジョニー・ブラックとコンビを組んでいたプレイヤーなのだが、プレイヤー名もどんな武器だったかも悠は思い出せない。

POHやジョニー・ブラックが濃く印象深い存在だったからか、いくら頭を捻つても微塵も思ひ出せない。

アスナやクライン達に聞こうかとも迷ったが、必要以上にこの件を広めるのも不味いかと考えた悠は手に持ったスマートフォンをテーブルに置いて、もそもそ朝食を再開させる。

ピンポーン

不意に部屋のインターホンが鳴るとドアホンで確認すると香蓮の顔が映り、ドアを開ける。

「おはー、なしたの?」

「うん、おはよう。あのね、今日の夜って空いてる?」

「え……もしかしてデートの誘い?」

香蓮の言葉にB・O・Bの事やラフィン・コフィンの事をサツパリ忘れてしまい、ドギマギしてしまう。

香蓮は気配りもできるし優しさもある。そして何より、美人で悠のドストライクにあたる女性。そんな女性から今夜空いてるかと聞かれれば期待してしまう。

「違う違う。この間、ケーキ沢山くれたでしょ?」一番上のお姉ちゃん、その旦那さんがお礼に夕食一緒に食べないかって」

「ありやりや残念」

デートではないと真顔で言われ、軽い口調で言うも内心ではかなり項垂れている。

「んー夕食かー。嬉しいんだけど生憎、今夜は予定入ってるんだよ。だから残念ながら今日は無理だな」

「……もしこれがデートなら？」

「え？もちろん、そんな予定、ドタキャンさせてデートエンジョイするけど？」

「ハハ」

興味本位で聞いてみた質問に悠は迷いなく答えると香蓮は悠の頭に軽くチョップを入れながらツツコミを入れる。

「冗談冗談。ちよーつと今夜はドタキャン出来ない用があったから、例えデートでも断れなかったんだよねー」

あはは、と乾いた笑いをする悠。今夜はGGOでBOBの本戦に出場。そして、ここにいるであろう元ラフィン・コフィンのメンバーであろうデスガンとウフフ、アハハの銃の撃ち合い殺し合いをしなければならぬ。そんな事より小比類巻家と楽しいであろう夕食を囲んでいたかったと依頼をしてきた菊岡、その菊岡に紹介したキリト、そしてBOBに出場エントリーをした自分を内心で激しく呪った。

（こーうなったら、デスガンは何が何でも殺す。その後にキリトもぶつ殺す。そして菊岡

さんの財布をこれでもかかってぐらい散財させてやる)

悠はフッフフ……、と不敵な笑いを浮かべていると香蓮にドン引きされるのだった。

鼠との再会

夕方、悠は菊岡から教えて貰った住所を頼りに運転する。結局、和人とは連絡が取れなかった。

教えてもらった住所に和人もいるらしいので、其処で話そう決めて指定された病院に向かうも、既に和人はGGOの世界にダイブしていて、またも話す事は出来なかった。担当医の安岐に会い、簡単な挨拶を済ますと悠もGGOの世界に向かうのだった。

「ふーむ。キリトとフレ登録してねえからなあ」

ダイブしてマイホームに来たルタオは座りながら顎に手を当てて考える仕草をする。フレンド登録をしていれば、登録相手とメッセージのやり取りが出来るだけでなく、フレンドが何処に居るか位置情報を知らせてくれる機能がある。現にルタオの数少ないフレンド、レンは現在ログアウト中と記されている。

SAO時代には互いにフレンド登録をしていたが、GGOでは登録してないので、どちらの機能も使用する事が出来ない。これなら昨日のうちに登録でもすれば良かったと悔やんでも後の祭りだ。

「仕方ない」

ルタオはそう言い切るとテーブルの上に銃を取り出し、メンテナンスを始める。GGの世界ではSAOに比べて武器の耐久値は非常にシビアだ。

定期的にメンテナンスをしなければ破損してしまう。軽度な破損なら修理可能だが、完全破損だと再度手に入れなければならない。

レア度の低い銃なら別にいいだろうが、ドロップ率の低い高レアな銃、例えば対物ライフルなどを完全破損させてしまうと目も当てられない。

故にプレイヤー達は定期的にNPCに頼んだり、スキルで武器をメンテナンスする。

「……………よしー」

およそ30分、黙々と作業していると終わったのか愛銃のヴァリアント・ザッパーを構えて確認する。

「……………問題なしー」

そう言うのとヴァリアント・ザッパーを含む他の武器もストレージにしまう。

そのままルタオは立ち上がると家を出て消耗品の補充をしに武器屋に向かった。

☆ ☆ ☆

行きつけの武器屋に向かって弾薬などの消耗品を補充し終えたルタオは総督府に向

かうと中にある端末機から本戦登録を済ませると地下1階にある大きな酒場に向かう。

「……………ふう」

会いてる席を見つけるとそこに座ると飲み物をオーダーし一気に飲み干す。

「いい飲みっぷりだな」

「んあ？」

空のカップをテーブルに置くのと同時にルタオに向かって声をかけられて振り向く。そこには迷彩服を着込んだ細身のイケメン男性のプレイヤーが複数の他プレイヤーを連れて立っていた。

「デイヴじゃん、おっひさー！」

ルタオがデイヴと名乗ったプレイヤー、本名はデヴィッドに手を上げながら気軽に挨拶をすると座るよう促す。男達は遠慮なく座るとルタオはデヴィッドに着いて来てたプレイヤー達について尋ねた。

「この人達は？」

「今組んでるチームの奴等だ。今日は俺の応援に来てくれてな」

なるほどと眩きながら再度飲み物を頼むと一口飲む。

「リーダー、コイツの事知ってるの？」

チームメンバーの1人がデヴィッドに聞くと、1つ首を縦に振ってチームメンバーの

問いに答えた。

「まだお前達と組む前に何度かな。俺が覚えてる範囲ではAGI型で拳銃とナイフを装備していた。昔から青い衣装なのは変わらないようだな」

「ゲームの中なんだから好きなカラーリングにしてもとやかく言われなからねえ。それに青っていい色じゃん」

「そうだな。お陰で狙いやすい。青い服装のプレイヤーはお前ぐらいだからな。しつかり撃ち殺させてもらう」

「そんな弱者を虐めないでくれよ。ブルちやうじやないか」

「弱者？お前が？あり得ないな。俺から見たらお前は闇風と同様に警戒してるんだ。悪いが油断も加減もしない」

デヴィッドの宣言にルタオは肩を竦めて苦笑いをする。

「が、その苦笑いも何かを思い出したかのような笑みを浮かべてデヴィッドに警告をした。」

「俺を警戒してんならもう一人、キリトつてプレイヤーにも警戒しときな。アイツは俺と同じくらいの実力者だから」

「……そうか、肝に命じとこう」

デヴィッドはそう言うのと立ち上がり、チームメンバーと共にその場から去って行っ

た。

「……つてデスガンの事すっかり忘れてた!？」

デヴィッドとの細やかなやり取りを楽しんでたルタオはハツとした様子で思い出す。これから行われる本戦ではゲーム内の殺し合いだけではなく、本当の意味での殺しが行われる。ルタオは気合を入れ直して立ち上がる。

「おやおや、お兄さん。随分と意気込んでるネ」

待機ドームに向かおうとした矢先、またも声をかけられその出鼻を挫かれてしまった。出鼻を挫かれ、やや不機嫌そうに声が出た方に振り向くとローブを着たルタオより少々背が低いプレイヤーが立っていた。

「攻略組でも名の知れた青の双銃剣に黒の剣士。君達の活躍を楽しませてもらうヨ」

目の前のプレイヤーの発言にルタオは不機嫌な態度からあからさまに警戒の色を濃くする。ローブのフードを深く被ってるせいで顔が見えず性別がわからない。

単純に元SAOプレイヤーかもしれないが、昨日笑う棺桶ラフィン・コフィンと思わしきプレイヤーと出会っている。相手の正体を掴めず、ルタオの正体を掴んでる相手に鋭い視線を向けているとフードを着ているプレイヤーは愉快そうに話しかけてきた。

「そう怖い顔しないでくれヨ。オレたちはルー坊と久し振りに会えて嬉しいんだゾ?」

「オレっち?ルー坊?……え、ちよつと待って」

過去、SAO時代にてルタオの事をルー坊と呼んで、自分の事をオレっちと変わった一人称をしたプレイヤーは一人しかいない。

警戒した表情から一転して、あからさまに動揺してるルタオを見て目の前のプレイヤーは「ニヤハハー」とこれまた変わった笑い方をしながらウィンドウを開いて自分の名前をルタオに見せた。

アルゴ

その名前を見た瞬間、バツと勢い良く相手を見る。アルゴと言うプレイヤーは愉快そうに笑いながらフードを取ると短い金髪の髪に茶色い瞳をし、頬にはネズミのようなヒゲが3本ずつ描かれた女性プレイヤーだった。

「うんうん、あのルー坊がこんなにも大きくなるなんてお姉さんは嬉しいヨー！」

「アルゴ!? 本当にあのアルゴなのか!？」

ルタオの問いにアルゴはニツと笑う。

「勿論サ! 鼠のアルゴとはオレっちのこと。今後ともご鼻屑にナ!」

アルゴはそう言うとういんどウを捜査しているとルタオの前に、アルゴがフレンド登録を希望しました○　??”と表記したウィンドウが現れるとルタオは迷わず○を押して登録する。

「なんでGGOに? てつきり、キリト達がいるALOやつてるかと思ったのに」

アルゴとわかると再度席に座って話しかける。アルゴもそれに倣うと席についてルタオの質問に答えた。

「勿論ALLOもやってるサ。ただオレっちの偽物が多く現れてナ。しばらくはこつちで情報屋をする事にしたのサ」

やれやれと言った感じで答えるアルゴ。

SAOでは鼠のアルゴと呼ばれていて、攻略組としてではなく、情報屋として多くのプレイヤーに知られている。

情報料が他に比べてやや高めだったが、他の情報屋に比べると正確で丁寧な情報なのでルタオやキリトはよく世話になっていた。

「早速だけど聞きたい事がある」

「お？なんだなんだ？オレっちの知ってる情報なら何でも答えるヨ！」

アルゴの言葉にルタオはB o B本戦メンバーの名前が表記されているウィンドウを見せる。

「今回の大会で初参加のプレイヤーを教えてください」

真面目な問いかけにアルゴはニツと笑うとウィンドウを一瞥することなく答えた。

「そんなの見なくても分かるヨ。キー坊とルー坊を除くと銃士^{マステイア・イクス}Xにペイルライダー、

これスペルミスカ？多分、ステイブンの3人だナ」

アルゴの名乗った名前を確りと覚えたルタオは情報料のクレジットを渡そうとしたが、それを察したアルゴは手で制した。

「金を受け取らないって珍しいじゃん。明日は銃弾でも降るのかね？」

「なーに情報は貰うサ。ただ、金じゃなくて情報が欲しい。あの日、75層のボス攻略で何があったのか。どうして途中でクリアーして解放されたのか知りたいんだ」

アルゴの言葉にルタオはチラツツと時間を確認すると本戦開始までまだ時間はある。ふう……と1つ息を吐くと75層、ボス攻略時の話を始めた。

75層のボスフロアーは結晶無効化空間で撤退する事も瞬間回復できない中でボス、スカルリパーと1時間にも及ぶ戦闘、14人の犠牲の末勝利。

暗鬱な空気の中、突如キリトが血盟騎士団団長であるヒースクリフに攻撃、その際にヒースクリフから破Immortai壊Object不能のシステムメッセージが表示された。

それと同時にキリトはヒースクリフが茅場晶彦だと露呈。そして茅場晶彦との1対1のデュエルでキリトは勝ち無事に現実世界に戻る事が出来た。

ルタオは簡潔にだが、あの日の事を話すとアルゴは何度か頷き、スッキリした表情を見せた。

「いやあく！ようやく知れてスッキリしたヨ！」

「そいつは良かった。……なあ、もう1つ聞きたい事あるんだけどさ。……ラフコフの

幹部メンバー、P o Hとジョニー・ブラック……後1人誰だっけ？」

その問いにアルゴは困惑しながら懐疑的な視線を向けて来た。

何故、今になってそんな事を聞ク？

口には出さずとも、アルゴから醸し出す雰囲気がそう語っている。それと同時に。

隠し事無しで話せ。

とも語っている。ルタオは顎に手を当てて考える。別に笑う棺桶ラフィン・コフィンの名前を思い出す必要はあまりない。

死銃デスガンⅡ笑う棺桶のメンバーという確証がある訳でもない。それに、そのプレイヤーが死銃本人だとしてもプレイヤー名を変更してる可能性が大きい。

でも、モヤモヤしてるのも事実。名前を思い出してスッキリした状態で本戦に挑んだ方がいい。他人であるアルゴにこの件を話しても良いものかと思っただけ、情報屋として名を馳せてるアルゴなら自分達の知らない情報を持つてるかも知れないと考え、死銃デスガンの事を包み隠さず話した。

「おいおい……勘弁して欲しいヨ！」

話し終えるとアルゴは額に手を当てて聞かなければ良かったと後悔と怒りの表情を浮かべていた。

「有り金を全部出す。だから何か知ってる事があれば教えてくれ」

「ルー坊の前に現れた奴は本当にラフコフのエンブレムをしてたんだナ？」

「間違いない」

「ボロマントで手には包帯を巻いてて、不気味な仮面をしてたんだナ？」

「ああ」

アルゴの問いに肯定しながら頷く。

「悪いが、其奴の今の名前は俺たちも知らない」

知つてればラツキー的な程だったのでアルゴの言葉を聞いてもあまり気落ちはしなかつたが、アルゴの続け様に言つた言葉はルタオの興味を大いに唆つた。

「ただ、ルー坊の言つた容姿と一致するなら俺たちも見つた事があるゾ。」

……アレは、先月の末頃カ？街の中央広場に集まつたメンバーの一人が、突然乱入して来たプレイヤーに撃たれた所を偶然目撃したナ」

アルゴの言葉を聞いて撃たれたのは薄塩たらこだったかと思ひ出す。そんなルタオを他所にアルゴの説明は続いた。

「種類まではわかんないが、撃つた銃は拳銃ダ。撃つて暫くすると、そのプレイヤーが突然回線落ちしたんだ。ただ、それにも驚いたんだが、それ以上に驚いたのは撃つたプレイヤー、突然姿を現したんだ。そして撃たれて回線落ちしたプレイヤーを見終わった後
もナ」

「突然現れたってどういう風だよ？ 転移結晶のように転移して来たとしても？」

「いや、そんなエフェクトはなかった。一瞬で現れて一瞬で消える……まるで幽霊みたいな奴だったヨ」

事前に聞いて良かったが、目視出来ない相手の対処は楽ではない。アルゴの言葉を聞いて頭を抱えていると本戦開始10分前のアナウンスが流れた。

「……死銃の事を聞いて良かった。いくらだ？」

「情報料はいい。ただ、其奴には確りと落とし前つけてやレ！ それとラフコフの名前だガ、……………ダ」

「サンキュー」

アルゴに礼を言うと言席から立ち上がり、待機ドームに向かおうとする。

「俺つちが出来る事はない。だけど、応援はしてやるサ！ ……仲の良いレンちゃんの方も含めてナ！」

アルゴの言葉を聞いて慌てて振り向くも、既にアルゴは「ニヤハハ〜！」と笑いながら手を振って逃げ去ってしまった。

「相変わらず油断も隙もないネズミだな」

恐らく、大分前から自分の事を見つけて張り込まれて情報を盗み見られてたと苦い顔をする。

足の速さは天下一品のアルゴに追い付くのは無理だし時間がないと判断したルタオは溜息を吐いて、今度こそ待機ドームに向かうのだった。